
COSMIC STAR

コーヒー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COSMIC STAR

【Nコード】

N3503C

【作者名】

コーヒー

【あらすじ】

宇宙の中に存在する6つの惑星を舞台に、2人の男女が謎に包まれた組織と対峙する。その過程で体感する世界の危機と一つの愛。二人が織り成すSFファンタジー。（SF要素は少ないかもしれませんが）

世界設定&言語説明(前書き)

見なくても、本文でわかるかもしれませんが、人物紹介も含め、読んでいただければ、より一層楽しめると思います。

世界設定 & 言語説明

舞台は、地球からかなり離れた宇宙にあり、地球より優れた技術をもつ六つの惑星。

・革新の惑星「テトランス」

大都会で、人々がかなり集まる星。様々な物が手に入る流行の場所。

・極寒の惑星「エルリール」

年中冬で、雪に覆われる星。スラム街もあり治安はあまりよくない。

・水の惑星「グザリス」

九割が海の星。小さい陸が1つあるだけの平和な場所。

・王制の惑星「オアランド」

唯一、王が存在する星。その為、争い事は少ない。

・砂漠の惑星「ヴァイラ」

砂漠が広がる暑い星。砂漠がある以外は、特に特徴はない。

・上記の五大惑星を管理する為の施設だけがある惑星「ジェルラード」

世界中から集められた人で、部隊が形成され、攻撃、防御共に強力な戦艦を持つ。かつて、五大惑星それぞれでトップに立っていた人物、五聖官が集結し、20年前に施設が作られた。

この五大惑星は、一般の宇宙船が行き交っており、自由に行き来する事ができる。その発着場がそれぞれに建設されており、宇宙航空ステーションと呼ばれている。

この世界では、転送装置と言うタイムゲートがあり、指定された

場所にワープすることができる。個人で簡単にワープ出来る小型転送機械もあるが一般には出回ることなく、限られた距離内でしかワープ出来ない。主に、飛んでいる戦艦からの乗り降りとして利用される。

仮想装置という物は、実体に近い幻影を造り出すことができる。これは、ジェルラードが使うことを禁止している。

ちなみに、モンスターも存在する。一般に想像出来る魔法と言うものは無く、剣や銃、槍やナイフなどの武器がある。ここでの銃は、弾丸ではなく、エネルギー物質が出る、レーザー銃のような物だ。弾のリロードと同じで、エネルギーパックというものがあり、簡単に違う種類に交換もできる。

五大惑星には、警備部隊という組織がいる。ジェルラード部隊よりも弱く、簡単ないざこざの解決をする。但し、オアランドだけは王が管理する騎士団になる。

ハンターというのもおり、世界中に存在し、警備部隊が定めたモンスターや犯罪者などを捕まえ、金を得る仕事。

バージルズという組織もあるが、全てにおいて謎に包まれている。

登場人物紹介

*レイド・ナーグス(男)

この物語の主人公。身長は176、21歳。少し短い黒髪に整った顔立ち。性格は普段はマイペースだが、状況を見極める能力は高い。ハンターをしており、剣一つで色々な場所を訪れている。

*シリア・マグレーナ(女)

この物語のもう一人の主人公。

身長は165、20歳。

髪は海のような青色で腰近くまで伸ばしている。顔立ちは世間一般で言う美少女だが、その顔とは裏腹に、常に冷静で強い度胸を持っている。周りからは冷め気味と思われることが多いが、レイドと出会って、少しずつ笑顔も増える。周りに適切な指示を与えることができるリーダータイプ。2年前からある組織を追って旅をしている。武器は銃。

*フラン(男)

レイドと同じハンターで、困っている人を放っておけない性格。身長は180の32歳。武器は槍

*ルイ(男)

同じくハンターでレイドとフランの知り合いだが、あまり本編での出番はない。17歳の少年。

*グリーン(男)

エルリールに住む武器職人。その腕はかなりの物でレイドの知り合い。

*マッド(男)

ジェルラード戦艦、グリンピアの船長。度々登場する。

*ステイブ(男)

ジェルラード第三部隊長。それなりの強さをもつ。

*ジェシカ(女)

オアランドの王女。性格はおっとりしていて、レイド以上のマイペース。レイドの苦手な人物。

* テイラス (男)

ジェシカの護衛を務める人物。武器は槍を使い、騎士団の中でも一番強い。

* ジーマ (男)

五聖官の一人で、最年長。他の4人は本文中にて。

* ラーグ (?)

常に無表情で、度々レイド達の前に現れる謎の人物。

* デイオ (男)

幻想装置を操る少年。ナイフを使う。

* ダイン (男)

ホストのような感じの怪しげな人物。ラーグとデイオに命令を下す。

出会い（前書き）

感想などお待ちしています。

出会い

この果てしなく続く宇宙の中には、様々な謎があり、様々な可能性もある。太陽系の惑星はその中のほんの一部に過ぎない。宇宙から見れば、本当に小さくて狭いものだ。

この永遠とも言える宇宙には一体、何があるのだろうか？どんな事が起こっているのだろうか？

ここは、宇宙の5%を纏める惑星。ジェルラード。高い技術力に強い部隊を持つこのジェルラードを中心に、テトランス、エルリール、グザリス、オアランド、ヴァイラの五大惑星が交流を保っている。その惑星間は、多数の宇宙船や戦艦が飛び交っている。

しかし、100%平和なんてことは有り得ない。殺人も起こればテロリスト、モンスターだっているのだ。それは、人間に知能があるから。それが無い人間は何の為に存在しているのか？それは誰にもわからないだろう。

この6つの惑星の中で、一番人口の多いテトランス。そこからこの物語の扉が開かれることになる。

「ふう〜。まいったな…。」

ここは、テトランスの大型ショッピングモールの入り口前。多く

の人が足を運ぶこの噴水広場で、レイド・ナーグス、21歳は、大変困っていた。

「何度も言わせるな！この男の命を助けたかったら、俺達のボスを解放して連れてこいって言ってんだよ！！」

そう。レイドは、何らかの犯行グループによって人質に捕られていた。普通、こういうのは女性を狙うだろ！と、レイドは思ったが、このバカ共にはそんなこと頭に無かったようだ。

この場所には、レイドと、犯行グループ5名、それを囲むようにテトランスの警備部隊、その後ろに野次馬、といった具合だ。

どうやら、先日捕まった奴らのボスを解放させるために騒ぎを起こしたらしい。警備部隊も必死で説得をしている。

「わかった。わかったから落ち着け！今、お前達のボスを連れてくるため手続きをしている。もう少し待ってくれ！」

警備部隊の一人が嘘丸出しの言葉を投げかけている。

「早くしやがれ！」

信じてるんだ！と思いつつも、レイドは自分を捕まえている人に尋ねる。

「なあ、ボスが解放されたら、俺を放してくれるかな？」

なんの緊張感もないような口調でそう言った。それがレイドの性格なのだ。しかし、

「お前には逃げきれぬまで人質になって貰う。どうするかはボスが決める。」

やっぱり殺す気かよ！と心の中で叫び、溜め息をひとつ吐く。

未だに警備部隊とのやりとりが続く。これは持久戦かな、と思っていた時、一人の女性が警備部隊員の制止を振り切り近づいて来た。年齢はレイドと同じか、少し年下。165センチ程度のスラックとした体格で、腰まである青色の髪が特徴的な綺麗な女性だ。

その女性はレイドを捕まえている男の前に立つと、

「ねえ、あなた達。人質は女性の方がいいんじゃない？私が代わるわ。」

表情を変えることなくそう言った。その行動に周囲の人達も啞然としている。

「テメエ、近づくな！どうせ警備部隊の人間だろう！」

レイドに銃を突きつけていた男が、女性の方に照準を向けた。

（さすがに、これはなんとかするか…。）

そう思ったレイドは、その瞬間を見逃すことなく、女性に向けられた銃を掴み、男の顔面に肘打ちを喰らわせた。倒れる男から銃を奪うと、近くにいた仲間の二人の脚に銃を撃つ。瞬時の事で何も出来なかった男達は脚を押さえ倒れ込む。

そして、すぐ反対側の二人にも撃とうとしたが、既に倒れ込んでいた。女性に目をやると、普通のより少し大きめの銃を構えていた。ちなみに、ここでの銃は弾ではなく、特殊エネルギーを発射させるものだ。

有り得ない程瞬間的に終わったので、全ての人が固まっていた。開いた口が塞がらないとは、このことを言うのだろう。

レイドは、奪った銃をその場に捨てると、女性に近づく。

「ありがとう。助かったよ。」

笑顔で言うレイドに対し、女性は表情を崩すことは無かった。

「お礼なんていいわ。それに、あなた一人でも大丈夫だったみたいだし。」

女性も銃を腰元へ戻す。

「君は警備部隊の人…じゃないよね？」

「ええ、違うわ。どうかしら？違う場所でゆっくり話さない？」

「いいね！そうしようか。」

二人は、警備部隊の横をすり抜け、その場を後にした。

これが、この二人の初めての出会いであった。

仲間

二人は、噴水広場から少し離れたカフェテリアへ来ていた。少し奥の方へ腰掛け、レイドはコーヒー、女性の方は紅茶を頼んだ。端から見ればお似合いのカップルだろう。

「それで？君は何者？」

何故か少し楽しげな口調で、カップを持ち上げ一口飲んでから尋ねるレイド。

「私は、シリア・マグレーナ。何者って程でもないけど、只の旅人よ。あなたは？」

「俺は、レイド・ナークス。ハンターをしている。まあ君と一緒に旅人みたいなものかな。」

このハンターというのは、凶悪なモンスターや指名手配犯などを倒して金を得る職業だ。殆どのハンターは世界各地を回る為、旅人となら変わりはしない。

「成る程ね。それであんなに強かったのね。武器は持たないの？」

「剣を使うんだけどね…、この前モンスターを斬った時に折れちゃってさ。」

レイドは苦笑いを浮かべた。この世界では武器が主流になっている。魔法というものは比較的無い。

そして、今度はレイドが質問する。

「それで…シリア、だっけか。何故俺に近付いた？なんの目的がある？」

打って変わって真剣な目で尋ねる。

「意外と鋭いのね。結構、のんびり屋さんに見えるんだけど…。」

「まあ…、普段はね。」

今度は笑顔に変わる。コロコロ表情を変えるレイドだが、一切隙を見せない。それがレイドの強さを表していた。だからこそ、シリアも何かを期待していた。

「あなたに近付いたのは偶然だけど、あの動きを見て目的が出来たわ。」

「その目的とは？」

シリアは少し間を空けてから口を開いた。

「私と一緒に、バージルーズを調べて、潰して欲しいの。」

「こりやまた大きな目的だな！バージルーズといえば五大惑星全てで耳に入るが、一切謎に包まれた組織だ。噂によれば、ジェルラードと同じ程の勢力を持つ、って言われている。まあ一般人は知らない人が多いだろうけど。何故そんな奴らを敵に回そうとする？」

レイドは何故シリアがバージルーズという組織を知っているのか、また何故敵対しているのかが解らなかった。バージルーズという組織は、レイドでさえ少し耳にしていた程度。しかし、このシリアは他に何か知っている、と確信出来た。

「それは……貴方には関係ないわ。」

シリアが俯く。あの気の強そうなところが、今は全く感じられなかった。それを見たレイドは頭を掻く。

「一緒に潰せ、と言ったときながら、目的は関係ない、か。そんなじゃ今まで誰も納得しなかったら。」

「……そうね。今の、無かったことにして。」

そう言って、シリアは席を立ち、店を出ようとする。

「待て待て！誰も俺が行かない、なんていってないぞ！」

「え！？」

レイドの意外な言葉に、シリアも驚き、振り返る。レイドは笑顔でシリアを見ていた。

「俺に会えた事を感謝しろよ。生憎俺は、厄介事は嫌いじゃないんでね。」

シリアは、ゆっくりとレイドに近づく。

「本当に手伝ってくれるの？下手すれば死ぬかもしれないのよ！」

（死ぬって……そこまで危険！？）

と、レイドは思ったが、口には出さなかった。

「……まあ、シリアが何を知っているのかは知らないけど、一人で行って死なれてもなんか俺の責任みたいだし。それに！こんなお姫様を危険に晒す訳にはいかないだろ。」

その言葉で、シリアがレイドの前で初めて、小さな笑みを浮かべた。それにシリア自身が驚いた。

（笑顔なんて、2年振りかしら！）

「私はお姫様なんて柄じゃないわ。……でも、ありがとう。レイド。」

「うん！素直で宜しい！でも、そうになると俺も剣が必要だ。少し寄り道するぞ。」

「ええ、別に今すぐに、って訳じゃないから大丈夫よ。」

「じゃあ行くか！」

二人は店を出て大通りを歩いている時、シリアが声をかける。

「それで？何処へ向かうの？」

「エルリールだ。」

「様々な鉱物が手に入り、年中極寒の惑星、エルリール、か。」

そこはシリアも何度か行ったことがある場所だった。あまりにも寒くて、遠くまででは行かなかったが…。

「俺が行くのは、その中でも、闇商売をしている場所だけだな。」

「聞いたことあるわ。珍しい鉱物や武器を高値で売りさばっているスラム街があるって。」

「そこは、法なんてモノは通用しないからな。販売が禁止されている物も手に入れることが出来る。その分、厄介な奴らが多いから気をつけるよ。」

「平気よ。私なら。」

「…そうみたいだな。」

レイドは何の不安もないような顔をしているシリアを見て、そう

呟いた。

エルリールへ向かうため、二人が向かったのは、五大惑星を行き来するための宇宙船の発着場、宇宙航空ステーションと呼ばれる場所。

ここは、商人やハンター、旅行者などの一般人が移動する為の場所だ。時折、ジェルラード戦艦などの特別な宇宙船も来るが、入り口はそれ専用の物が作られているので、一般人が乗ることは出来ないようになってる。

レイドは受け付けに行き、エルリール行きの予約を済ませた。

「タイムゲートBから14時出発。あと1時間だ。どうする？」

このタイムゲートは宇宙船まで一気にワープで移動出来るため、すぐに入っても、宇宙船の中ではやることがない。

「そうね。しばらくこの辺りを歩きましょう。」

「そうだな。」

二人は、ステーションの中を散策し始めた。この宇宙航空ステーションは、大抵の星ではいろんな店を構えている。特に、人の多いこのテトランスでは、様々な店が並び、大体の物はこの中で手に入る。

10分くらい歩いただろうか、後ろから、レイドを呼ぶ声が聞こえ、二人は振り返った。そこには、長い槍を持った、30代ぐらいの男が立っていた。

「やっぱりレイドじゃねえか！」

見境無く大声を上げる。近くを歩いている人も、何事かと振り返るぐらいだ。

顔は怖そうだが、悪い人には見えない。

「フランか！久しぶりだな！」

レイドもフランと呼んだその男を笑顔で迎える。

「知ってる人？」

レイドの対応を見たシリアが尋ねた。

「ああ。こいつはフラン。俺と同じハンターだ。」

「オイオイ、レイド。いつからこんな美人な彼女が出来たんだ!?」
フランは、マジマジとシリアを見ながら言った。それにシリアは困惑することなく口を開く。

「そんなんじゃないわ。レイドには私の用事を手伝ってもらっているだけよ。」

シリアの言葉に笑みを浮かべたフランは、レイドの肩に腕を掛ける。

「何にしても、良い奴を見つけたな！コイツはハンター界でも一、二を争う強さを持つ。まあ少しのんびりしてる所もあるが、頼りになる奴だ。必ず役に立つぞ！」

「それはお前も一緒だろう。困ってる奴がいたらすぐ助けようとする。まあそのせいで何人の女に騙されたかは黙っといてやるよ。」

レイドはフランの腕を振り払いながら皮肉った。

「んなことはいいんだよ！」

「それより、フランもどっか行くのか？」

「ああ。エルリールの部隊からモンスター退治の依頼が来てな。全くだ！もう少しそれぞれの惑星の警備部隊を強化してほしいぜ。弱い奴を何人集めてもなんにもなりやしねえ！」

「それは同感だな。」

レイドは人質になったときの事を思い出し、大きく頷いた。

「そうね。実際にあの使えなさは問題ね。何かの争いを治めているのはハンターだって聞くし……。」

シリアも二人に同意した。

警備部隊とはそれ程のレベルである事は大体の人が知っている事実だ。

「まあ、そんな事より、俺達もこれからエルリールへ行くところな

んだ。宇宙船の中までは一緒だな！」

「そうか！じゃあもう行くところ！あと20分で出発だ。続きはその中で話そう！」

フランがそう促した後、三人はエルリールへ向かうため、タイムゲートBへと歩いて行った。

襲われた宇宙船

エルリールへ行くため、宇宙船へ乗り込んだレイド、シリア、フラン。

乗客は思ったより少なく、15人程度だろうか。その為、巨大な宇宙船の内部はガラガラだった。三人は外が見えるように作られた大きなガラス張りの休憩フロアへ来ていた。

『皆さん、私がこの宇宙船の艦長、アルバートです。間もなく、エルリールへ向けて離陸します。』

船内放送が終わると、すぐに宇宙船は動き出した。さっきまで何もなかった景色も、一瞬にして銀河の風景へと変わっていた。

「何度見ても、幻想的な場所ね。」

ガラス越しに見る宇宙の様子に、うつとりしながらシリアが呟いた。

「意外とロマンチストなんだな。」

「悪かったわね。」

少し怒ったようなシリアの表情を見て、レイドが更に付け加える。

「いや、普段滅多に見ることは出来ないだろうなあ、と思っただけ。」

「でも、確かにこの風景は何度見ても飽きることはない。」

フランもそう言うが、レイドはどうでもいいのかのように大あくびをした。

「着くまで2時間だよな。少し寝るわ。」

そう言ってレイドは客室へ消えて行った。

「ハア、相変わらずだな…、レイドは。」

「本当にマイペースなのね。」

「ここぞつて時は頼りになるんだがな…。」

「そこで頼りにならなかつたら、レイドの取り柄が無くなるわよ。」

「ハッハッハッ！その通りだな！」

乗客数十人を乗せた宇宙船は、順調にエルリールへ近付いて行った。

だが、到着まであと30分と言う時に、大きな揺れによってレイドは目を覚ました。

「……なんだ？この揺れは？」

「レイド！大変よ！」

口調は慌ただしいが、態度は冷静なシリアが部屋に入って来た。

「何かあったのか？」

「モンスターが2体入り込んだわ。近くに謎の戦艦も後を着けてるつて。」

「モンスター……？参ったね……こりゃあ。フランは？」

あくびをしながらベッドから降りるレイド。

「今モンスターと戦ってるわ。乗客も非難させたし、船長にも戦艦が攻撃してきたら次元ワープで逃げるように言っといいたから、後はモンスターだけよ。レイドもさっさと来てよ！」

それだけ一気に言うと、シリアは部屋を去っていった。

「……あいつ、リーダーの素質あるなあ。」

シリアの迅速な判断に感心した後、ゆっくりと部屋を出ていった。

休憩フロアへ行くと、シリアとフランがモンスターと戦っていた。

「レイド！お前も何とかしろ……！」

モンスターに苦戦しながらもフランが叫ぶ。そのモンスターをしばらく見ていたレイドは、

「なんとかって言われてもなあ……。俺、武器持ってないし。ここは二人で何とかしてくれ。俺は原因を探るわ。」

そう言って、奥の通路へ歩いて行った。

「フラン！レイドはこのモンスターが何なのか気付いてるの？」

「ああ、恐らくなあ！あいつの見る目はかなりのモノだ。戦わなくても気付いただろう！」

「……やっぱり、頼りになるわね。」

「だから言つたる。役に立つつて！」
二人はレイドを信じて戦い続けた。

一方、レイドは1つ1つ客室を覗いていた。その行動に慌てた様子は無く、丁寧に調べていった。奥の部屋の扉を開けたとき、レイドの動きが止まった。そして、静かに中へ入る。

「こんな時にモニターを見てお勉強かな？」

レイドの声に驚き、急いで振り返る一人の少年。まだ15歳前後だろうか。

少年の手元に映し出されるモニターには、シリアとフランが懸命に戦っている映像が流れている。

「へえ、お兄さん、二人の仲間だよ。いいの？このままにしよう！」

「だから君の元に来たんだよ。あのモンスター、仮想物体だよ！どこで手に入れたのかな？」

「お兄さんには関係ないよ。それより、なんでわかったの？」

少年の顔は、真剣な表情に変わっていた。

「簡単な事だよ。あらかじめ宇宙船の内部にモンスターを入れておくことは実質不可能。それに、あの二人があ程度のモンスターに苦戦するはずがない。実体ならね。となるとあれは幻影しか有り得ない。仮想物体を出すにはそれなりの近距離じゃないと無理。そして、転送機械もね。あの戦艦は君の仲間達か……」

笑顔で話すレイドに、少年の顔が歪む。

「全部正解だよ！だけどね、僕はあまりなめられるのは好きじゃない……」

その言葉と同時に、少年はナイフを投げつける。しかし、レイドも的確に飛んでくるナイフを顔の前で掴み取る。

「いい腕だな。だけど、俺もなめられるのは好きじゃない。」

レイドは、ナイフを投げ返す。そのナイフは、少年の手に握られていた小型の機械に命中し、床に転がった。

「それが幻影装置だよ。これでモンスターはもう消えたな。」

「……流石だね。」

少年は、別の機械を手に持つと、光に包まれ、その場から消えていった。

「転送…か。」

レイドは部屋を出ると、二人のいるフロアへと戻った。

「それで？あの仮想物体を出していたのは誰だったの？」

シリアは戻ってきたばかりのレイドに尋ねた。

「何者かはわからない。モンスターを操っていたのは、15歳前後の少年だった。最後は転送で逃げられた。」

「簡易転送となると範囲内に限られる。後を付けてきていた戦艦の仲間だな。」

フランがレイドの言葉を聞き、自分なりに答えを出した。それにレイドも頷く。

「だろうな。問題はなぜ一般の宇宙船を襲う必要があったかだ。」

そこへ、タイミングよく、船長のアルバートが向かってきた。

「謎の戦艦は逃げて行きました！乗客も全員無事です！あなた方のおかげです。」

アルバートはそう言って、丁寧に頭を下げた。

「アルバートさん。この宇宙船が襲われた理由について、なにか心当たりはありませんか？」

レイドが尋ねる。アルバートは少し間を取り、口を開いた。

「これは極秘事項なんだが…、この宇宙船を守ってくれた君達なら大丈夫だろう。」

実は、この宇宙船はエルリールに行った後、ジェルラードへ向かう予定だったんだ。」

「この一般専用の宇宙船が、なぜジェルラードへ行くの？」

普通、一般の宇宙船はジェルラードに行く事はない。ジェルラー

ドには観光名所なんて所は無いため、行き来するのは部隊の船艦だけである。

「この宇宙船には、テトランスで開発された最強戦闘機砲、メテオカノンを積んでいる。テトランスでは大量生産が難しかった為、完成品と製造技術データをジェルロードへ持っていくつもりだった。」
「なる程…。つまり、ジェルロード戦艦で行くと、明らかに目立つから、カモフラージュとしてこの宇宙船で運んでいたのね。」

シリアは、納得したようにアルバートを見る。アルバートもそれに頷く。

「だが、これはテトランスの一部とジェルロードの幹部しか知らない事だ。なぜバレたのかが解らない！」

「……どつちかに裏切り者がいるんじゃないか？」

不意に言ったレイドの言葉は確実に的を得ていた。4人の間には、少しばかり静寂が訪れる。

『船長、間もなくエルリールです。コントロールルームへお越し下さい。』

船内放送が流れ、アルバートが顔を上げる。

「なにはともあれ、君達のお陰で無事にエルリールへ着くことが出来た。」

コントロールルームへ向かおうとするアルバートにシリアが声をかける。

「それよりアルバートさん。エルリールからはジェルロード戦艦に来てもらった方がいいわ。情報が漏れているなら、また襲われなくても限らないから。」

「ああ。そうしよう！君達の事もジェルロード部隊に言っとくよ。」
そう言って、アルバートはその場を去っていった。

レイドは少し寛ぐ為、休憩用の椅子に腰掛けた。

「にしても、厄介な事に巻き込まれたな。」

レイドはそうボヤいた。

「あら！厄介事は嫌いじゃないんでしょ？」
シリアもレイドの隣に座る。

「撤回するよ……。」
複雑な表情に変わるレイド。それを見ていたフランは声を上げ笑う。

「なんだか、二人の相性は良さそうだな！これからも上手くやって行けそうだな！」

「何、フラン？その意味ありげな発言は？」

「俺とシリアが付き合っつて事じゃないか？」

人事のように笑顔で言うレイドに対し、シリアは表情を変えることはなかった。

「そんなこと……有り得ると思っつ？」

「さあ……どうかな。」

そんな会話をしつつ、宇宙船はゆっくりとエルリールに着陸し始めた。

現れた人造生命体

エルリールに降りた三人は、宇宙航空ステーションの一階ロビーに集まる。

「じゃあフラン。ここでお別れだな。」

「ああ。俺は警備部隊の迎えが来るまで、ここで待たなくてはいけないからな！お前等はスラム街へ行くんだろ？シリアを護ってやれよ！」

フランはレイドに目をやった。

「分かってるよ。お姫様には指一本触れさせないよ。」

「レイド！それでこそ男だ！」 よく言った！というようにフランはレイドの肩を叩く。その二人の妙な展開の中、

「ハイハイ。行くわよ。」

シリアは呆れたような口調でレイドを促した。

レイドとシリアはフランと別れ、ステーションから外へ出る。そこは、真っ白な雪が積もり、今もなお空を舞っている。このエルリールは、年中冬の極寒の惑星。雪が止む事はあるが、全部溶けることはない。

「やっぱり、寒いわね。」

シリアは両手に息を吹きかける。

「じゃあ、急いで行きませうか。」

「スラム街ってどこにあるの？」

「ここから二つ街を抜けたところにあるリディエラの中だ」

レイドとシリアは、街と街を繋げるタイムゲートでリディエラへ向かった。

傍から見れば、スラム街があるような感じでは無いほど静かな街であったが、その街の奥には確かに存在した。ボロボロの服で座り込んでいる老人もいれば、ゴロツキも多々歩いている。人の多いテトランスでさえ、こんな光景を見ることはない。その中を歩いている

と、案の定、ゴロツキ共に囲まれ、シリアが標的にされる。

「そのこの美人なお姉さん！俺達と一緒に遊ぼうぜ！」

「…悪いけど、遠慮しとくわ。」

シリアは冷めた目でゴロツキを見る。

「そんな頼りなさそうな男より、俺達の方が役に立つぜえ！」

「どうかしら？あなた達じゃ役不足に見えるけど…。」

口元を緩めながら男達に言った。シリアの態度に、男達は見る見る顔つきが変わっていく。

「いい度胸じゃねえか！少し痛い目にあって貰うぜ！！」

シリアに殴りかかって来る一人の男を、レイドが困惑した顔で蹴り飛ばす。

「うちのお姫様を怒らせないで貰えるかな？」

「テメエエ！！」

残りの奴らが一齐にレイドに向かって来る。しかし、レイドの敵ではなかった。短時間で全てのゴロツキ共はレイドの前に倒れ込んでいった。

「バカなやつらね。」

「行こう！店はすぐそこだ。」

レイドとシリアは少し先の古びた家へと入る。

「外が騒がしいと思ったら、やっぱりお前か…レイド。」

部屋の中にいた無精髭の男がレイドに声を掛けた。

「少しは学習して欲しいよ。それよりグリーン！頼んでいた物、出来てるか？」

「ああ。少し待ってる！」

そう言っつて男は奥の部屋へ姿を消した。

「本当にここで剣が手に入るの？」

シリアは何もない部屋を見回してからレイドに尋ねる。

「ああ。あいつはグリーン。最高の武器職人だ。武器が表に出回る事は無いけどな。」

すると、グリーンが一本の剣を持って戻ってきた。

「ホラ！前みたいに簡単に折れる事はないぜ。」

それを受け取ると、鞘から剣を抜いた。その剣は、輝かしい程の白銀の刀身であった。

「想像以上だ。有り難く使わせて貰うよ！」

「今度来るときは、手土産の一つでも持ってきて貰いたいね！」

「ハハハ。そうするよ。じゃあまたな！」

二人は、グリンの家から出る。

「とりあえず今日は、最初の街で一泊しましょう。」

「そうだな。」

空は既に暗くなってきていたので、二人は最初の街で宿屋を探しに戻った。

街で宿屋を探している時、

「レイドさん！」

その声に二人は振り返る。そこには一人の少年が息を切らして走ってきていた。

「ルイか！お前もフランと一緒にモンスター退治に呼ばれたのか？」

「ええ…。フランさんからレイドさんがエルリールに来ているって聞きましたから！」

ルイは、呼吸を整えながら話す。どうやらルイもハンターのような。

「何かあったの？」

シリアが慌てていた理由を聞く。

「実は、最初のうちは只のモンスターだったんですけど、突然見たこともない化け物が現れたんです！」

「化け物…？」

「そうです！もう刃物は効かないし、銃も効かないし、身体はイカツイし、人間のような感じなんですけど顔はもう人間の顔じゃないし。」

「とりあえず、落ち着いてみようか。ルイ。」

慌てふためいているルイの肩に手を置くレイド。
「とりあえず、そこに行ってみましょう。」

レイドとシリアはルイに案内され、その場所へ向かった。

その場所は辺り一面真っ白な草原であった。その中央で、フランと警備部隊の人間が戦っていた。その相手は人間をベースにしたような2メートルはある怪物。身体はどす黒く、筋肉は半端なものではなかった。

「なるほど……。確かに化け物だな。」

相手を見て、ルイの言葉に納得した。レイドとシリアの姿が目に入ったフランは二人に駆け寄る。

「悪いな、二人とも！」

「別にいいわよ。それより、何なの？アイツ。」

「それが分かれば苦労はしない。並大抵の力ではないうえに、あの筋肉で刃物も銃も通用しない！人間のようで人間じゃない。あんな化け物初めてみるぞ。」

確かに化け物を見ると、かすり傷は有るものの、致命傷となる傷が全く無い。

「しょうがねえ！ここは俺が説得しよう。」

そう言っただけレイドは化け物に近づいていった。

「……説得って……？バカでしょ！？アイツ。」

シリアは呆れた表情で呟く。一方のフランも呆れていた。

「……それはシリアの方がよく知ってるだろう。」

二人は静かにレイドを見守った。

レイドは化け物の前に立つと、

「あゝ。君は完全に包囲されている！大人しく降参　うわっ！」

レイドの説得虚しく、化け物は攻撃をしてくるが、それを瞬時にかわす。レイドの立っていた場所は、怪物の攻撃で大きなクレーターが出来ていた。

「コイツは処刑だな。」

レイドは貰ったばかりの剣で斬りつけるが、その剣でも致命傷を与えることは出来ない。未だ戦い続けているレイドを見て、フランが口を開く。

「何か弱点でもあればいいんだが…。」

「弱点かどうかはわからないけど、やってみるわ。」

シリアは、銃のエネルギーパックを外し、新たに違う種類の物を装着する。

「レイド！下がって！」

レイドはその声を聞き、化け物から距離をとると、シリアは銃を撃つ。それが命中すると、化け物は全身炎に包まれた。

「火炎性エネルギーか！？」

「ええ。でも、さっきのでエネルギー切れね。次は無理よ。」

シリアはそれを捨てると、いつものエネルギーパックに変え、銃を戻した。

化け物が倒れたのを確認したレイドは、シリアの方へ戻っていった。

「そんなんあるなら言ってくれよ。」

「言う前にレイドが向かって行ったのよ！私のせいじゃないわ。それよりレイド、あれについて考えられる事は？」

「人造生命体…だな。」

「人造生命体だと!？」

フランが驚く。人造生命体は人間とモンスターの力を融合したものだ。その危険度から全ての惑星で製造を禁止されている技術である。

「まあ何にしろ、これでジェルロードも動くだろうな。」

レイド達は、その場を警備部隊に任せ、街へ戻って行った。

「デロンが殺られたか…。あまり使えなかったな。」

茂みの中で先程の化け物を見ていた三人の人物。その中の一人が

眩いた。

「お前の任務を邪魔したのは奴らか？」

「そうだよ。」

少年が答える。

「…次はお前の任務だったなラーグ。奴らが来るかもしれない。お前の力を見せつけてやれ！」

ラーグと呼ばれた人物は頷く。

「メテオカノンを手に入れば、ヴァルログ様の計画も完璧に近づく。」

そう言い残し、三人の人物は暗闇の中へ姿を消していった。

奪われた命

翌朝。三人は宇宙航空ステーションの中にあるカフェで朝食をとっていた。そして、会話は昨日の話になる。

「にしても、人造生命体を造ったのはどこの誰なんだ？」

フランが疑問をぶつける。

「おそらく…バージルーズの仕業だと思っわ。レイドも頷く。」

「フランはバージルーズについて何か知らないか？」

「バージルーズか…。確かに良い噂は聞かないが、何をしているかは全く知らん。恐らく、ジェルラードでさえ、何も掴めてないだろうな。」

フランはお手上げ、というポーズする。それにレイドも肩を落とした。

「だよな。その辺の一般人はその存在すら知らないくらいだ。どこにいるのかも解らない。」

「本部かどうかは知らないけど、バージルーズのいる惑星なら知ってるわ。」

「本当か!？」

シリアの意外な言葉に、フランの声も大きくなる。レイドも今まで気になっていた事を尋ねる。

「シリア。そろそろ教えてくれないかな。バージルーズの何を知っているのか、なぜバージルーズを追っているのかを…。」

しばらく俯いていたシリアだったが、そうね。と言って話し始める。

「私の父がバージルーズの研究員だったのよ。」

「だった…?」

「ええ。私は小さい時から母がいなくて、18まで父に育てられたわ。忙しい仕事みたいだったけど、父は必ず帰ってきてくれた。私

はそれだけで嬉しかった。でも、突然父が私に言った。「バージ
ルーズは最低の組織だった。父さんは明日で仕事を辞めようと思う。
帰ってきたら別の場所で暮らそう」って。……次の日から父は帰っ
て来なかったわ。私は絶対バージルーズに殺されたと直感できた。」
「それで、その場所は？」

「私はその時住んでいたのは、水の惑星、グザリス。」

「グザリスか……。確かにグザリスは9割が海の平和な星だ。そんな
ところにバージルーズがいるとは誰も思わない。」

フランが腕組みをして言った。

「ええ。でも私もそれなりに調べたけどグザリスのどこに有るのか
は分からなかった。」

「それで、一緒に調べて、尚且つ奴らを潰してくれる仲間を探して
いた、ということか。」

「ごめんなさい。最初に言っとけばよかったわね。」

「いや、いいさ。でもこれで決まったな。次の目的地はグザリスだ。」

「俺も手伝おう！乗りかかった船だ。最後まで付き合おう！」

フランの言葉に、レイドとシリアは笑顔で頷く。

グザリスへ行くために受付のあるフロアーまで来たレイド達であ
ったが、何やら騒々しい雰囲気にもまれていた。

「なんかあったのか？」

「受付で聞いてみましょう。」

三人は受付へ行き、何が起こっているのかを聞いた。

「只今、ジェルラード戦艦が戦闘中です。危険ですので一般の宇宙
船は運航を停止しています。」

「ジェルラードが戦闘中だって！？」

フランが驚きの声を上げた。ジェルラード部隊ができたのは20

年前。その間に一度もこんな事は起こらなかった。

「君らは、あの時の！」

突然後ろから聞こえた声に振り返ると、そこには最初に襲われた宇宙船の艦長、アルバートが立っていた。

「たしか…アルバートさん、でしたよね。もしかして襲われているジェルラードの戦艦には…」

「ああそつだ。メテオカノンを積んでいる。今、ここの警備部隊と対策を練っているんだ！君達も来てくれないか？」

「勿論です。」

レイド達は別室へ移動し、警備部隊に加わり、モニターに映る戦闘を見ながら今の現状を聞いた。

「今ジェルラード戦艦、グリーンピアが戦闘している場所は、ここエルリールから少し離れたこの位置だ。」

警備部隊員がモニターに、6つの惑星の場所を示したマップを映し出し指を指した。

「その位置だと、エルリールのすぐ近くね。ジェルラードの援護部隊が来れるのはどのくらい後なの？」

「普通に来れば3時間ちよつと…。次元ワープを限界まで使い続けるとも2時間後でしょう。」

「それじゃあ手遅れになる！」

「フランの言う通りだ。今は何機に攻撃を受けているんですか？」

レイドがアルバートに聞く。

「攻撃をしているのは現在3機。もう1機いるんだが、それは後を付けているだけだ。」

「転送目的、つてことね。」

「そうだろうな。現に何人が入り込んでいる。攻撃をしている3機は、ジェルラード戦艦にしてみれば脅威ではない。しかし、入り込んだ奴らが強敵らしい。それに苦戦しているということだ。」

「なら話は簡単だ！俺達が行けばいい。」

「……！」
フランの言葉に、警備部隊の人間も驚く。

「ジェルラード部隊の人間でさえ苦戦しているんだ！危険過ぎる！」
「いや、それしかない。奴らは多分バージルーズの連中だ。俺達はそいつらに用があるから丁度良い。」

「アルバートさん。宇宙船を出して貰えるかしら？転送出来るギリギリの距離まででいいから。」

レイドとシリアも行く気満々であった為、警備部隊は何も言えなかった。

「……分かった。準備はいいか？」

三人は頷く。

「こつちだ！来てくれ。」

レイド、シリア、フラン、アルバートは別室を飛び出し、宇宙船へ乗り込んだ。

「もし奴らにメテオカノンを盗られたら厄介よ。」

転送装置のある場所へ向かっている時に、シリアが口を開いた。

「しかも入り込んでいるのは人造生命体かもしれない。十分注意しないとな。」

三人が転送部屋へ辿り着いた時に、アルバートから放送が入る。

《間も無く転送出来る。準備をしてくれ！》

三人はタイムゲートと同じ機械の上に乗ると、光に包まれ、ジェルラード戦艦、グリーンピアへと移った。

「ここがグリーンピアか。相当厄介だな。」

グリーンピアは一般の宇宙船より複雑に出来ている為、簡単に場所を把握出来ないでいた。

「俺はコントロールルームの方へ行ってみる！」

「私はメテオカノンがある地下倉庫へ行くわ。」

「俺は適当に散策してみる。まだどこかで戦っているだろうからな！」

三人は武器を持ち、それぞれの場所へ散って行った。

レイドが船の先方にあるコントロールルームの方向へ走っていると、横に並んでいる部屋の一つから、人の声が聞こえてくる。その扉を開けると、二人の男が五体の敵と戦っていた。見たところ人造生命体の雑魚、といったところだろうが、二人の男は苦戦していたので、レイドも参加し、その状況を打破した。した。

「助かったよ。君は…？」

「俺はレイド。二人の仲間と共に助けに来たんだが、状況はどうなっているんだ？」

「俺達はバージルーズ第五部隊の一員なんだが…ほぼ壊滅状態だ。詳しいことは船長から話を聞いたほうがいいだろう。」

「そうするよ。お前達はどうするんだ？」

「俺達は怪我人の救助に向かう。」

「そうか。用心しろよ。」

レイドは二人と別れ、コントロールルームへ走る。それらしき扉が目に入ったのでレイドは開けてみる。その瞬間、2つの槍で道を塞がれた。

「何者だ！？」

「オイオイ、俺はレイド。ハンターだ。あんた達の敵じゃない。」

レイドは槍を持った二人の男を宥める。そこへ一人の男が近づくと、服装からしてグリーンピアの船長だろう。

「二人とも、この男は大丈夫だ。」

二人はレイドから槍を外す。

「すまんかったなレイド君。敵の中に一人、人間と区別の付かん奴がいてな。」

「いえ、あなたが船長ですよね？」

「そうだ。私がこのグリーンピアの船長、マッドだ。」
マッドはレイドを奥へと迎えた。

「マッドさん。戦闘機はどうなってますか？」

「攻撃していたものは全て撃ち落とした。しかし、後ろを付いてきている戦艦はこのグリーンピアと同等の力を持っている。撃ち落とすことが難しいのだが、向こうも攻撃をしてこない。一体どういう事か……。」

「恐らく奴らは転送の為にいるだけだ。今の状況を考えれば、メテオカノンは既に奪われている可能性が高いな。」

「恐らくな……。第五部隊の話では、さっき言った人のような奴が地下倉庫から出てくるのを見たらしいからな。」

「そいつは人じゃないんですか？」

「正確には分かんが、人としての感情や雰囲気は全く無かったと言っていた。そいつは今治療中だがかなり脅えて逃げ帰ってきた。」

「まさか…人造生命体か？」

「そうだとしたら、かなりの危機だ。それほど完璧な奴を造れるんだからな。」

二人の間に少しの沈黙が訪れた。

「……嫌な予感がするな。マッドさん。俺は少し船内を搜索してみます。」

「頼む。気をつけてな！」

レイドはコントロールルームを出ると、元来た道を戻り、船内を調べていった。そこへシリアが合流してきた。

「シリア！メテオカノンはどうだった？」

レイドの問い掛けに、シリアは首を振る。

「既に無かったわ。代わりに死体はあつたけどね。」

「やはりな。シリア。この中には完璧な人造生命体がいるかもしれない。」

「完璧な…！？」

「死体は恐らくそいつの仕業だろう。急いでフランと合流しよう。」

「そうね。」

二人はフランを捜して、船内を走り回った。そこへ、船内の中央から男の悲鳴が聞こえた。

「!?!?…行ってみよう。」

船内の中央部分で二人の男が倒れていた。

「こいつらは、あの時の二人か。」

「もう死んでるわね。」

シリアが脈を調べるが、既に無い。

「ぐあああ!!！」

再び男の悲鳴が聞こえた。今度は二人も知っている声だった。

「あの声は、フラン!?!」

「シリア、行くぞ!」

二人はフランの声のした方へ走った。

少し広いガラスの張つてある休憩場所へ行くと、フランが血を流し倒れている。その横には血の付いた剣を持つ無表情の人物が立っていた。シリアは透かさず銃を放つが、簡単に横へ移動され避けられる。その人物がフランから離れたのを見ると、二人はフランへ近づく。

「フラン!しつかりしろ!」

「レイド…。奴には…気をつける……………」

そこでフランは力尽きた。レイドは唇を噛むと、その人物に顔を向けた。

「お前は何者だ?」

「私はラーグだ。」

表情を変えずに、ただその質問に答えた。

「何故フランを殺したの?」

「その男がいたからだ。それに、お前達に力の差を見せつけろと命

令をされている。」

「見せて貰おうか！」

レイドは剣を向ける。

「既に帰還の命令が出ている。」

ラーグの身体が光に包まれる。

「逃がさないわよ！」

シリアが銃を撃つが、それも僅かに届かず消えていった。

「クソッ！」

レイドが壁を叩く。

「コントロールルームへ戻りましょう。」

「……ああ。」

二人はコントロールルームへ戻り、メテオカノンが奪われた事、ラーグにフランを殺された事をマッドに話した。

「やはり、人造生命体だったか……。」

「多分な。じゃなきゃフランが易々と殺られる筈ない。」

苦々しくレイドが答える。

「船長！ジェルラードの援軍が到着しました。」

オペレーターの一人在うとうと、武器を持って部屋の中へ入ってきた。

「マッド船長、大丈夫ですか？」

「ああ。第五部隊はほぼ全滅だがな。」

「そうですか……。」

マッドと話していた男は、レイドとシリアの方を向いた。

「初めまして。私はジェルラード第三部隊長のステイブと言います。あなた方の事は、アルバートさんから聞いています。」

「俺はレイドだ。」

「シリアよ。」

「もう一人いると聞いていたんですが…？」

レイドとシリアは顔を伏せる。

「死んだよ。」

「……そうですか。」

レイドさんにシリアさん。これからジェルロードへ来てもらえませんか？五聖官の方々が二人にバージルーズについて話を聞きたいらしいです。」

「そうね。この先の事を考えると、五聖官に会っておいた方がいいわ。」

「メテオカノンも奪われた訳だからな。」

二人は、思わぬ出来事もあり、目的地をジェルロードへと変えた。

バージルーズの狙い

ジェルラードという惑星は、もともと人の住めるような場所ではない。人間に必要な空気中の成分、水、光、全てが不足していた。その荒れ果てた地に、巨大なドーム型の施設を建設し、五大惑星を纏めようと計画、実行したのが五聖官と呼ばれる人達。

この五聖官は、五大惑星それぞれのトップに立っていた人間が集結したもので、計画をしたのが25年前。施設が出来たのはその五年後という、まだ新しい組織である。そして、優秀な戦力や、科学者などを集め、特殊部隊や戦艦を創立してその存在を無二のものとしていった。それがジェルラードである。

「なあステイプ。五聖官ってどんな人達なんだ？」

ジェルラードへ向かっているグリーンピアの中で、レイドが尋ねた。「そうだな。簡単に説明しとくよ。まず、ジーマ聖官。この方が一番の年配で76歳。ジェルラード計画を初めに提案した人らしい。次に、ハリー聖官。59歳の女性で、強力な戦艦の製造を計画した人だ。このグリーンピアもハリー聖官が考え出した。次に、ダミア聖官。こちらも女性の48歳。一番若く、見た目は20代と言っても信用する程の美しさだ。次に、グラゼン聖官。彼は元オアランドの王で、60歳。ジェルラード部隊を纏めている。次に、ヴァルログ聖官。65歳の強引な方だ。この方はあまりジェルラードにいいことがないから詳しい事はわからない。まあこんなところだ！」「成る程ね。とにかく凄い人物だったことはわかったよ。」「私達は五聖官って言葉しか聞いたことないから。なんだか楽しみなね。」

「そうだね。ジェルラードに関係してる人間でないと、顔を合わせることはないですからね。ほら、もう着くよ。」

ステイプはガラス越しに見える施設を指差す。

「でかいなあ。」

レイドはその施設を見て呟いた。
そして発着場の屋根が開き、グリンピアはジェルラードの内部へ降りていった。

そこには、数々の戦艦や小型の戦闘機が並べられており、ジェルラードの戦力が窺える。

「おかしいな……。」

ステイブが周りを見回す。

「どうしたんだ？」

「人が誰もいないんだ。普通、着陸、離陸する時は、何人か出て来るんだが、…誰も来ない。」

そのいつもと違う光景に、ステイブだけでなく、同じ第三部隊員も戸惑っている。

「入り口は他にもあるの？」

「いや、此処からしか中へは入れない。それにこのIDカードがないとその扉は開かないようになっている。」

「……とにかく、入ってみよう。」

ステイブはIDカードを機械に通し、更にパスワードを打ち込むと、巨大な扉が開いていった。その中の光景に、一同は驚愕する。血まみれで横たわるジェルラード関係者。それが真っ直ぐ続いた廊下の至る所に倒れている。

「だめだ、死んでる。」

「まだ温かい。そんなに時間は経ってないわ。」

レイドとシリアが一人の死体を冷静に分析をする。

「そんな……ジェルラードの内部を攻撃するなんて不可能だ！内部紛争でも起こったのか……。」

「そうとは言い切れないよ、ステイブ。」

「メテオカノンの時から予想してただけど、ジェルラード内に裏切り者がいるわ。」

「そんな馬鹿な……！」

いきり立つステイブをレイドが宥める。

「とにかく、五聖官が心配だ。案内してくれ、ステイブ。」

「……急ごう！」

ステイブを先頭に、一行は五聖官のいる場所へ走る。10分は走った時に、ステイブの足が止まる。

「ここだ！」

ステイブは扉を開ける。その広い会議室のような場所では、数人のジェルラード部隊と戦っている一体の人造生命体。ジェルラード部隊の後ろには四人の人物。人造生命体の後ろでは三人の人物が立っている。その三人の内、一人の顔を見て、レイドが叫ぶ。

「ラーグー！」

レイドの声で、戦闘は中止され全員がレイドの方へ振り向く。

「聖官！これは何事ですか！？」

ステイブが四人の人物に近寄る。

「ステイブ、良いところまで来てくれたな。ヴァルログの奴が裏切ったんじゃ！」

「ヴァルログ聖官が！？」

白い髭を伸ばした老人の言葉で、奥にいる三人の内、大柄の男が笑い声を上げる。

「裏切ったとは人聞きの悪い、ジーマ。私は元からバージルズ側の人間だよ！」

「ヴァルログ様はバージルズの創立者だ。ジェルラードができる前からのな。」

ヴァルログの隣にいたホスト風の男が割って入った。

「ジェルラード計画に参加したのはその方が都合良かったんでな。私一人が五大惑星の頂点に立つ為のな！」

「初めからそれが狙いだっただのね！」

五聖官の一人、ハーリーがヴァルログを睨む。それにヴァルログは笑いながら言葉を出す。

「その通りだよ、ハーリー聖官！」

「そんな簡単に五大惑星のトップに立つことが出来ると思っている

のか!？」

「グラゼン…。貴様には今の状況が見えていないのか?現にこうやってジェルロードは我々四人にここまで追い詰められている。そして、メテオカノンも既にバーシルーズの手中。お前達に勝ち目はないだろう。」

「それに、我々には人造生命体の製造技術も持っている。完全体さえ出来上がれば、お前達など敵ではない。もつとも、ラーグ一人でも充分だがな」

「ラーグは完全体じゃないのか!？」

レイドが驚きの声を上げる。

「確か、君達二人はラーグと顔見知りだったね。折角だから教えといてやるう!ラーグは完全体ではないんだよ。完全体とは一から体の構成を造り上げた、正に最強の生物兵器。人間から造られたラーグとは段違いなんだよ。」

「そんなものが造れるの!？」

ダミアが信じられないという顔で問い詰める。それをホスト風の男が答える。

「時間はかかるがな。それにまだ最後の材料が足りない。しかし、今のお前達ではラーグにすら勝てない。」

「何だと!？」

レイドとシリアは武器を構えた。

「ふむ…。レイドにシリア、だったか?何故無関係のお前達がバーシルーズに刃向かう?只の正義感からか?」

「無関係…?言ってくれるわね!父を殺した事が無関係だって言うの!？」

「父?名前はなんと言う?」

「…ヤマト・マグレーナ。」

シリアがそう言うと、ヴァルログはこれまでになく笑い声を上げた。

「ヤマトの娘か!良く覚えているよ!アイツは優秀な科学者だった。

「からな。今のバージルーズが有るのもヤマトのお陰だ。」

「殺しておきながらよく言うわね！」

「殺した？違うな！君のお父さんはまだ生きているよ。」

「嘘…。何処にいるの！」

「グザリスの研究所だよ。詳しい場所までは教えないがな！」

「ヴァルログ様。そろそろ行きましよう。」

「そうだな。五聖官達よ、…いや、既に四聖官か！我々は引き上げさせて貰う。精々苦しむがいい。NO、4。後はお前に任せる。」

最初に戦っていた人造生命体にそう言うと、ヴァルログ達は転送されていった。

「そんな…。ヴァルログ聖官が…。」

「ステイプ、思い詰めるのはコイツを倒してからにしろ。シリアも父に会いたければ闘え！」

二人はレイドの言葉に頷くと武器を構え、敵に向かって行った。

ジェルロード部隊とレイド、シリアは人造生命体を難なく倒した後、四聖官と場所を変え、話し合う。

「君達は強いな。先程の人造生命体は我々の部隊でさえ手子ずっていた奴だ。本当に助かった。」

一番の老人、ジーマが二人に御礼を言う。それに続き、髪の毛長い女性、一番若いダミアも口を開く。

「本当ね。アルバートから多少の事は聞いていたけど、ここまでとは…。」

「そんな大袈裟な事じゃないですよ。それより、ヴァルログがこれから何をすることが問題だ。」

「そうね。メテオカノンも盗られた今、いつ攻撃してきてもおかしくないわ。メテオカノンは一体、どのくらいの物なの？」

シリアが向かいに座っている四聖官の方を見る。それに、眼鏡を掛けたハーリーが答える。

「メテオカノンは戦闘機用の砲撃として造られた強力な物よ。最新式の高密度エネルギーを凝縮して打ち出すことが出来る。最大限に

チャージすれば大陸一つ軽く滅ぼせるわ。」

「でも、奴等にはジェルラード戦艦に匹敵する戦闘機は持ってないでしょう？戦闘機を作り直すつもりかしら？」

「シリアさんの言う通りよ。でも、メテオカノンはそんな使い方だけではないの。」

「どういう事ですか？」

レイドがハリーに聞き返す。

「メテオカノンは500万フィードは届く強力なレーザーを撃つことが出来る。」

「500万フィード？」

「ああ、ごめんなさい。簡単に言えばこの6つの惑星のどこから撃つても、全ての惑星の正確な位置を破壊する事が出来るってことよ。」

「

「ということとは、戦闘機に装備させなくても、地上から簡単に他の惑星を攻撃出来る、と…。」

「そういう事ね。」

「最悪な物を造ったわね。」

シリアは呆れ顔で言った。そこへダミアが割って入る。

「今思えばシリアさんの言う通りね。でも、それはこの五大惑星を守る為でもあるのよ。」

「それはどういう意図で？」

「私達は、これほどの科学技術を持ってしても、全宇宙の5%しか解明していない。その5%の中に、5つも惑星が有るのなら、きっとどこかに同じような惑星が存在するのよ。そしてそれは五大惑星を脅かす存在になるかもしれない。その対策としてのことよ。」

「その対策として造られた物が、逆に五大惑星の脅威となるとはね。」

「

レイドの言葉に、グラゼンが反論する。

「造らせたのは我々の命令だ。当然、それに耐えられるバリアシールドも開発された。他の星が襲われる事はない。」

「でも、惑星の中でその場に撃たれたら終わりよ。」

「それは…そうだが。」

そこでレイドは少し考えてから口を開いた。

「ハーリーさん。メテオカノンはどれくらいで作れますか？」

「そうですね。製造技術データは無事だったから、急げば2、3日つてどこかしら。」

「じゃあ急いで開発に取り組んで貰えますか？」

「…そうじゃのう。バージルーズを破壊するために必要かもしれんな。」

ジーマも納得する。

「そうね。急いで取り掛かるわ。あなた達はどうするつもりなの？」

「俺達はこれからグザリスへ向かう。恐らくどこかに研究所が有る筈だ。」

「二人で行くつもりか！ジェルロード部隊を何人か」

「今のあなた達にそんな余裕無いでしょ？今度攻められてきたら確実に終わるわよ。」

グラゼンの言葉を遮り、シリアがその要望を断った。

「それに、俺達二人の方が攻めやすい。」

「しかし、それでは……。」

「じゃあ代わりに欲しい物があります。」

「何だね？」

「小型爆弾です。」

「それなら、グリーンピアの中に有るじゃろつ。ついでにマッドに送って貰うといい。」

「分かりました。」

そこでレイドとシリアはその部屋を後にした。そして、マッドに説明をして、小型爆弾を受け取り、水の惑星、グザリスへと向かって行った。

グザリスでの出来事

「ここがグザリスか。気持ちいい場所だな。」

レイドは大きく伸びをする。グザリスは9割が海に囲まれた平和な場所だ。今まで、人の多いテトランス。極寒のエルリール。人工的に作られた空気のジェルラードと移動してきたので、澄んだ空気、青い空、心地いい風全てが新鮮に感じた。

「レイドはグザリス初めてだったの？」

あまりに気持ちよさそうにしているレイドを見て、微笑みながらシリアが尋ねる。

「ああ。こんなに平和な場所にハンターはいらないだろ。」

「それもそうね。ハンターには縁の無い場所かもね。」

「さて、とりあえず街を彷徨いてみるか。グザリスに大きい街はここしかないんだろ？」

「ええ。あとは小さい村しかないわ。」

二人は何もないステーションを出ると、街の中を歩いた。その途中、街の中央付近で人が集まっているのに気付き、近寄って行った。「デラニーおじさん？」 シリアが一人の男に声を掛けた。そのおじさんは目を丸くしてシリアを振り返った。

「…シリアちゃんか!？」

「ええ。お久しぶりね、デラニーおじさん。」

「二年前より一段と大人っぽくなったな!それにこんなに立派になつて!」

「シリアちゃん!久しぶりじゃない!」

「お久しぶりです。ジェーンおばさん。」

シリアの周りには、次々と数多くの人が集まっていった。それほどシリアは街では人気があったのだろう。

「それにしても、こんないい彼氏を連れて来るなんて!グザリスを

出ていった時は想像出来なかつたわよ！」

「ハハハ…。」

レイドは頭を掻いて、シリアとの関係を説明した。

「それより、何かあったの？こんな所に集まって。」

シリアの言葉で、全員の顔が暗くなる。

「実はな、ファーニちゃんがさらわれたんだよ。」

「ファーニが！？」

「シリアの知り合いか？」

「…ええ。私が妹みたいに可愛がっていた子よ。今はもう13才の女の子ね。それで？誰にさらわれたの！？」

「テトランスにいるようなホスト風の男よ！いきなり抱えて、水の樹林へ来い、と場所を教えて消えていったわ。」

「警備部隊に任せたんだが、未だに帰って来ない。」

「ホスト風の男！？間違いない。ヴァルログと一緒にいた男だ！」

「となると…私達狙いね。」

「シリア。すぐ水の樹林つてとこへ行こう！その子が危険だ！」

「ええ！！！」

話を進める二人を見て、街の人が止めに入る。

「シリアちゃん！それは危険過ぎる！警備部隊でさえ帰ってこないんだぞ！！！」

「大丈夫よ。ファーニをこのままにしておけないし、レイドもいるから。」

「ああ、任せとけ！」

街の人達の制止を聞かず、二人は水の樹林へ向かって行った。

「入り組んでいるいる場所だな。」

水の樹林の中で、レイドは周りに気を配りながら呟いた。

「グザリスの人間も、滅多に入り込まない場所よ。」

先へ進んでいく二人だが、突然シリアが立ち止まる。レイドもそれに気付き、前方に目を凝らす。そこには、一人の少女が座り込み、

その周を10数体の人が彷徨っている。その傍らでは数人の警備部隊が倒れていた。

「人造生命体か？」

「恐らくね…。ファーニはまだ無事みたいね。警備部隊は怪しいけど。」

「シリアはファーニを助ける事を優先しろ。」

「分かったわ。」

「じゃあ行くぞ！」

二人は茂みの中から一気に飛び出し、レイドがファーニに気を配りながら戦い、シリアはファーニを抱え、少し離れた場所へ連れて行った。

「これでラスト！」

レイドはあっという間に10数体の人造生命体を倒した。そしてシリアの方に目をやる。

「ファーニは大丈夫か？」

「大丈夫よ！」

「シリア……お姉ちゃん？」

とっさの事で、固まっていたファーニが口を開いた。

「そうよ。大きくなったわね、ファーニ。」

シリアが頭を撫でると、ファーニはシリアに抱きつき泣き始めた。シリアは優しくファーニを宥める。その光景を微笑ましく見ていたレイドだが、木の上から一体の人造生命体が攻撃を仕掛けながら降りてくる。

「まだいたのか！」

レイドは瞬時に避けると、振り返りにした。

「ふゝ。危機一髪だな。」

「大丈夫！？」

ファーニを抱いたシリアが駆け寄る。

「ああ。」

「腕から血が出てる。」

「かすり傷だ。心配ない。それより早く戻ろう。街の人を安心させてやらないとな。」

「そうね。」

二人は、ファーニの救出に成功し、街へ戻って行った。

街へ戻ると、ファーニの母親が走って来た。それを見たファーニも母親に向かって行き、母親にしがみつく。

「良かったなあ、カーリーナさん。」

その光景に、自然と街の人も集まる。

「ええ！本当に。ありがとうね、シリアちゃん、レイド君。」

「いえ、元はといえば私達の責任ですから。それより、街の人達に聞きたいんですけど、この辺りで研究所があるって聞いたことないかしら？」

シリアの言葉に、街の人達は次々に顔を合わせていく。

「いや、聞いたことないな。」

「そうですか。」

シリアは肩を落とした。

「シリアの家に行ってみよう。お父さんが何か残しているかもしれない。」

レイドの言葉に、シリアも頷く。

「シリアお姉ちゃん、レイドお兄ちゃん。いつかファーニと遊んでね。」

ファーニがそう言ってシリアの足にしがみついた。

「分かったわ。ね、レイド。」

シリアはファーニを抱え上げ、レイドに同意を求めた。

「ああ。この問題を解決したら必ず、…な。」

父の日記

レイドとシリアは、街の奥にある一軒の家の前で足を止めた。

「ここよ、私の家は。」

「良いところに住んでたんだなあ。」

周りには他に家は無く、裏は青く続いた海が広がっている。

「ええ。私と父の…思い出の場所よ。入りましょう。」

家の中は二年間空き家だった事もあり少し埃っぽかったが、当時の生活が解るかのように片付いていた。

「お父さんの部屋は？」

「その前に、そこに座って。傷の治療してあげる。」

レイドをリビングのソファに座らせると、シリアは救急箱を取り出し、簡単な治療をしていった。

「綺麗に片付いてるな。」

「私は綺麗好きなの！」

「見た目そんな感じだもんな。本当に手掛かりは何もなかったのか？」

「ええ。それなりに家中探したけどね。はい、これでいいわ。」

「サンキューな。」

「父の部屋はこっちよ。」

部屋に入ると、シリアはビツシリ詰まった本棚。レイドはダンスの中や、机の引き出しを中心に調べ始めた。

調べ始めて1時間。これといった手掛かりは無く、シリアの周りには調べ済みの本が大量に積み上げられていた。これほど調べても、本棚の半分程だ。

「なんもねえーな。」

レイドも本棚の本をパラパラ捲っている。

「少し休憩しましょう。お茶を入れるわ。」

「そうだな！」

二人は立ち上がり、部屋を出ようとする。が、レイドの踏んだ床が僅かに音を鳴らす。

「ん!？」

レイドがその場所を2、3度踏みつけると、ギイイ、ギイイ、と音が出る。

「シリア、なんかあるぞ。」

「え?」

レイドはその場所を調べた。すると、ガコツ、とスライドし、その場所の板が外れた。

「本?」

レイドはその本を手にとると、汚れを払い、シリアに渡した。シリアはそつと表紙を捲った。

10月24日

「10月24日っていつたら、父がいなくなる2日前だわ!」

それは父の残した日記だった。シリアは次ね頁を捲る。

そこにはこう書かれていた。

私の娘、シリアへ

本当は、これを私がジェルロードへ伝えるのが一番だろうが、それが出来ない為、ここに記す。

シリア。私がいなくなればお前は必死で捜そうとするだろう。だが、シリアには幸せになつて欲しい。だから、直ぐにでもこれをジェルロードへ持って行ってくれ。絶対に独りで何とかしようなどと思ふな。それだけが心配だ。

私はバージルーズの研究者だった。研究所はグザリスの海底に存在する。東の海岸にある洞窟と繋がっている。何故そんな場所にあるかは、研究が失敗した時、街に被害を出さない為、と教えられていた。でもそれは違った。

私が研究していたのは、モンスターの細胞を調べ、人々の病気を

治すための実験をしていた。いや、その為の実験をしていた筈だった、と言った方がいいだろう。私はある時、偶然にも極秘実験の様子を目撃してしまった。そこでは、人とモンスターの力を融合し、人造生命体を造っていた。そのモンスターの力は、間違いなく私が完成させたものであった。

私の理論から言うと、モンスターの力との融合は極限られた人物しか合わない。逆に言えば、合う人物が現れた時、人並み外れた力を持つ最強の人造生命体が出来上がる。感情や痛みは無いが言葉を喋る事はでき、命令を忠実にこなす生物兵器だ。

既に、私には止めることさえ出来ない。だから私は、研究員を辞めることを決心した。しかし、奴らがそう簡単に辞めさせてくれるとは思えない。今日記を読んでいるということが物語っているだろう。

最後にシリア。お前は私にとって唯一の宝物だ。私の分まで幸せに生き続けて欲しい。

ヤマト・マグレーナ

シリアは涙を流し、本を閉じた。予想はしていた。だが、感情には勝てなかった。レイドもただ俯くだけ。

しばらく沈黙が続くが、シリアが口を開く。

「ごめんなさい。出発は明日でいいかしら？気持ちの整理をつけたいの。」

レイドに背を向けたまま、そう口に出す。

「ああ。でもシリア。ヴァルログも言っていた。君のお父さんはまだ生きてるって。…だから、可能性はゼロじゃない。」

「そうね。…でも、ヴァルログが本当の事を言うとは思えないわ。」

そう言ってシリアは自分の部屋に駆け込んだ。

重い空気が支配する中、ゆっくりと夜は更けていった。

悲しみの心、交わる想い

翌朝、レイドはソファアの上で目を覚ました。

「ふう。もう朝か…。」

「おはよう。」

レイドが起きたのを見たシリアが、コーヒーカップを両手に持ち向のソファアに座る。

「はい。コーヒー。」

レイドはありがとつ、と言ってそれを受け取る。そしてコーヒーを一口飲み、シリアに目を向ける。

「…もう、大丈夫か？」

「大丈夫よ。寝たらスッキリしたわ。もう少ししたら研究所に乗り込みましょう。」

スッキリした、と言うシリアだが、レイドにはどこか無理をしているように見えた。

「シリアは此処にいていいぞ。俺一人で行くから。」

「馬鹿言わないで！私が頼んだ事なのに本人が行かなくてどうするのよ!？」

レイドの言葉に間を空けることなく、強い口調でシリアは言った。

「それに…、可能性はゼロじゃないんでしょ？」

「……ああ、そうだな！」

1時間後、レイドとシリアは準備を済ませ外へ出た。おそらく、今日は雨。暗い雲に覆われた空は今にも泣きそうだった。これがどういった意味を持つのだろう、などとレイドは考える。しかし、答えが出てくる筈はなかった。

「レイド？行くわよ。」

「あ、ああ。」

レイドはそこで思考を止め、歩き出した。

シリアの家は、海岸近くに在った為、洞窟まですぐに着いた。

「行き止まりか。どこかに隠し通路でもあるのかな？」

洞窟の奥まで入るが、道は途切れていた。二人は辺りを入念に調べ、石壁に付いていたボタンを押し、研究所までの通路を見つけると、海底へと続く長い階段を降りて行く。

「行くぞ、シリア。」

階段の先にあつた扉の前で、レイドはそつと扉を開けた。海底に在る為、ジェルラード並みに広く、少し肌寒い。

レイドは奥へ進む途中、至る所に爆弾を仕掛けていった。

「何だ！お前達は！？」

不運にも、曲がり角で二人の研究員と遭遇してしまつたが、レイドは瞬時に気絶させる。そして、近くにあつた部屋に誰も居ない事を確認すると、二人の研究員を引きずり込み、着ていた白衣を脱がす。

「シリア、これを羽織れ。」

二人は白衣に身を包み、再び廊下へ出る。この場所がバレることは無いと思ひ込んでいる研究員達は、同じ白衣を着たレイドとシリアに疑問を持つ事もなかつた。二人が堂々と散策していると、「幹部以外立ち入り禁止」と書かれた看板を発見する。躊躇うこと無くその先の通路を進んでいると、一際大きな扉が目に入る。

「……間違いなく、何かあるわね。」

「良い予感はないけどな。開けるぞ。」

レイドが扉を開ける。

「これは！？」

「……人造生命体の失敗作保管場所ってどこかしらね。」

その広い部屋の中には、びっしりと並べられた液体の入ったカプセル型の装置。その中に固定されている、人とは言い難い人造生命体。

「間違いがないな。一体どれだけの人を犠牲にすれば気が済むんだ！」

レイドは唇を噛み締め、怒りを隠すように言葉を出した。

「……気が済む事なんてないのよ。ここまで出来る組織なんだから。」
「狂ってやがるな。」

レイドは、何台在るのかも分からない程のその装置の所々に爆弾を仕掛けていった。

「やはり此処まで来たか……。」

「!？」

突然の声に二人は扉の方を振り返る。そこにはホスト風の男と一体の人造生命体の失敗作が立ち塞がっていた。

「お前はあの時の!」

「そういえば自己紹介がまだだったな。私はダイン。ヴァルログ様の側近だ。」

「ダイン!悪いがこの研究所は破壊させて貰う!」

レイドは、時限爆弾の装置を見せる。それを見たシリアが止める。

「ちよつと待って!父を捜すのが先よ!」

「爆破は構わない。この研究所はもう用済みだからな。それから、ヤマトの娘よ。父に会いたいか?」

「当たり前よ!本当に生きているならね。」

「生きているさ。ヴァルログ様もそう言っていただろう。」

「何処にいるの!？」

シリアはダインに銃を構える。その様子を見たダインは大声で笑う。

「何処にいる……だと?此処にいるじゃないか。私の横にな!」

「ま……さか。」

銃を構えていたシリアの腕が下がる。

「そうさ!この失敗作がヤマトなんだよ!」

ダインは面白そうに悲惨な事実をシリアに告げた。

「うそ……でしょ……?」

「嘘じゃない。これに見覚えは有るかい?」

ダインは一枚の紙切れを取り出し、シリアに投げる。シリアは、

横にひらひらと落ちた紙切れを拾い、目を向ける。

「~~~~!!」

それは一枚の写真。その古びた写真に写っているのは小さいころのシリアであった。シリアは口に手を当て涙を零す。

「モンスターになる瞬間まで握り締めていたよ。残念ながら失敗作になってしまったんでな。声を聴くことはもう出来ないがな。」

「貴様!!」

「我々を裏切ろうとするところという結果になる。君達も試してみたいんだがな…。じゃあヤマト君。君の娘と久々に遊んであげるといい。」

そう言っただインはその場を後にしようとする。

「お前は殺す!!」

レイドは剣を抜き、背を向けるダインに狙いを定める。しかし、今は怪物と化したヤマトが邪魔をする。それによって簡単にダインに逃げられたレイドは一度シリアの元へと戻る。

「クソツ。シリア!あれはもうお父さんじゃない!闘うんだ!!」

レイドの言葉はシリアの耳に入る事は無かった。

「シリア」

もう一度声を掛けようとするレイドだったが、既に怪物は二人に向け、攻撃を仕掛けていた。レイドは意を決して剣を構えて、怪物に突き刺した。

「……悪く思ふな。……シリアを守る為だ……。」

レイドは怪物から剣を引き抜いた。ゆっくりと倒れ込む怪物とレイドの目が合う。

「……!!」

レイドは驚いた。倒れ込む怪物が笑っているように見えた。…いや、確かに笑っていた。間違はなく笑顔だったのだ。その姿にレイドは立ち尽くす。そして、倒れ込んだ怪物にシリアが駆け寄った。

「お父さん!いや、死なないで!!」

「……シリア……。」

「お父さん……?」

シリアにも、レイドにもはつきりと聞こえた。失敗作の人造生命体が言葉を出した。笑った。そして今、目から涙を流していた。普通なら考えられない事であった。二人の想いが科学技術の領域を超えた、としか言いようが無い。その後何か言っているようであったが、その言葉はレイドに届かなかった。そして、そこでヤマト・マグレーナは静かに息を引き取った。

レイドは落ちていた写真を手に取り、シリアに近寄る。

「……シリア、……いくぞ。」

シリアはレイドの言葉に首を振る。

「じゃあ…どうする?」

「……私も死ぬ…。」

シリアは今にも消えそうな声でそう呟いた。それを聞いたレイドは唇を噛み締め、目をとじた。そして直ぐにシリアの腕を掴み、強引に立ち上がらせると、頬を叩いた。シリアにとって、レイドのこの行動は信じられなかったのだろう。涙が流れる目で、レイドを睨んだ。それに戸惑う事もしないレイドは大きな声を出す。

「お前が死んでどうする！お父さんの日記に何て書いてあった！？お前のお父さんの願いは何だった！？お前が死ぬ事じゃ無いだろ！お前が死ぬことを願っても……俺がさせない！！」

そう言うレイドは、シリアの手を強制的に引っ張り、その場から走り去った。

外はやはり雨が降っていた。この雨は、俺達を冷静にさせる為、泣いている事を隠す為に降っていたんだな、と心の中で空に向かって呟いた。

シリアを洞窟の穴付近に座らせると、レイドは雨の打ち付ける海沿いに足を運ぶ。そして、ずっと続いている海を眺めながら、爆弾のスイッチを押した。海は激しく吹き上げ、大きな渦を巻いた後、何事も無かったかのように平凡な海へと戻っていった。

シリアは洞窟の壁にもたれかかり静かに寝息を立てていた。

「ごめんな……シリア。」

小さくそう呟くと、シリアを担ぎ家へと戻る。

シリアをベッドに寝かせ、毛布をかけた後、父が大事にしていた写真を顔の横にそつと置き部屋を出る。

リビングへ戻ったレイドは、コーヒーの入ったカップを持ち、雨の見える窓際へ移動すると、

「シリアの悲しみも苦しみも……、全部洗い流してくれよ。」
そう雨に願い事をかけた。

その日の夜中、レイドは僅かな物音で目を覚ます。

「シリア……」

レイドの目に入ったのは、静かに外へ出て行くシリアの姿だった。レイドもゆっくりソファから起き上がりシリアの後を追った。

「お父さん。……私はこれからどうしたらいいの？」

雨が降りしきる中、洞窟の在った海岸へ移動したシリアは、海を見つめ呟いた。何を考えようと、シリアの頭の中には何も浮かばない。

「……風邪引くぞ。」

その声で、シリアはゆっくりと振り返る。レイドには泣いているのかどうかは分からなかった。

二人は見つめ合ったまま、静かな時が過ぎていく。

「俺を……恨んでいるか？」

その静けさの中、優しい声でレイドが尋ねた。

数秒後、シリアが口を開く。

「いいえ。私は……私自身を恨んでいるわ。…何故私が産まれてきたの？…私がいなかったら、お父さんはもっと幸せだったんじゃない

いの？…フランも、私と逢わなければ死ぬ事は無かったんじゃないの？レイドだって私と」

シリアはそこで口を閉じた。

レイドが優しく、正面からシリアを抱き締めていた。

シリアの目から、自然と涙が零れる。

「そんなに自分を責めるなよ。お父さんは、シリアがいたから幸せだったんだ。フランもシリアを助けたかったんだよ。……シリアがそんな調子だと、二人とも更に心配するぞ。……シリアは独りじゃないから。俺がいるから。俺がずっと側に居てやるから……そんな事言っなよ。」

レイドが優しく言ったその言葉で、シリアにも久々の笑みが戻った。

「それって……プロポーズ？」

「さあ、どうだろうね……。」

「ふふ、宇宙船の時と同じ答えね。」

「そうだったか？」

「そうよ！……お父さんが最後に言った言葉、教えてあげる」「何？」

「……いい男を見つけたな、だって。」

「見る目あるな。君のお父さん。」

「フフ、そうね。あと、フランもね。」

振りつける雨が見守る中、二人はそっと口づけを交わした。

次なる目的地

「旨いな！この飯は！」

「ほとんどが海だもの。漁業が盛んで、新鮮な魚がすぐに食べられるわ。」

昨日の雨が嘘みたいに晴れている朝。二人はグザリスの海鮮料理を堪能していた。

「で、これからどうする？」

「そうね……。一旦ジェルラードへ戻るべきかしらね。」

その時、ジェルラードの聖官から受け取っていた通信機が音を鳴らす。

「あら、噂をすれば聖官から通信ね。」

シリアがボタンを押すと、二人の間にモニターが現れ、四聖官が映る。

「二人とも、大丈夫だったかね？」

ジーマが二人に尋ねた。

「ええ。こちらは大丈夫です。」

「研究所も破壊しました。何かあったんですか？」

「実はな……。先程オアランドの街で謎の船艦が現れたらしい。」

ジーマに代わり、グラゼンが口を開いた。

「謎の船艦？バージルーズですか？」

「恐らくそうだろう！目的は分からんが、このままほっとく訳にはいかない。オアランドには騎士団がいるが、一応君達にも向かって貰いたい。」

「別にそれは構わないわ。でもオアランドでどうすればいいの？」

「オアランドは王制の惑星だ。まずはその宮殿へ行って貰いたい。」

話はもう付けてある。今グリーンピアがグザリスに向かっているから、もう暫く待つといてくれ。」

「わかったわ！」

そこで通信は切れた。

「今度はオアランドか。何を狙っているのやら。」

レイドは料理を食べながら呟いた。

「そうね。選択肢が有りすぎるわね。」

「とりあえず、ステーションに行ってみるか。」

二人は店を出ると、ステーションへ向かった。

「あら？ファニーだわ。」

「本当だ。何してんだ？こんな所で。」

二人が見たのは、ステーションの入口付近で座っているファニーの姿。

「どうしたの？」

シリアが声を掛けるとファニーは顔を上げ、笑顔で駆け寄って来た。

「ファニーね！シリアお姉ちゃんとレイドお兄ちゃんを見送りにきたの！」

シリアに抱きつき元気な声を出す。

「あれから毎日来ていたのか？」

「そーだよ。だっていつ行っちゃうかわからなかったんだもん！」

「はあ。元気だねえ。」

ファニーの行動に少し呆れるレイド。

「ごめんねファニー。今度遊びに来るから。」

「うん！絶対だからね！」

ファニーはシリアと指切りをすると、元気よく去っていった。

「……何？」

シリアは見つめてくるレイドを睨む。

「いや、…お前、なんか子供には優しいな。」

「レイドもあんな風に接して欲しい訳？」

「…………それは気持ち悪い。吐き気がするな…………。」

「……撃つわよ。」

「おっ！ついに仲間割れか！？」

二人の後ろに笑顔のマッドが現れた。

「おっ。さあシリア！早く行かないとオアランドが危ない。」

「俺にはオアランドよりお前の身の方が危ないと思っぞ。」

シリアを見た後にマッドが呟いた。

その後、オアランドへ向かうグリーンピアの中で、レイドはシリアからの殺気を感じながら縮こまっていた。

敗北

オアランドへ降り立った二人は、宮殿前で足を止めた。

「これまた…派手な建物だな。」

レイドはその輝かしく、壮大な建物を見て目を丸くする。

「そうね。これぞ宮殿、といった感じね。」

シリアも感心の言葉を出す。そこへ、一人の騎士が近づいて来た。

「レイド様に、シリア様ですね。お待ちしております。私は王女の護衛役、テイラスと申します。早速、王女の所へ案内いたします。」

「

「ああよろしく。それにしても王女だったのか？」

「前の王がグラゼン聖官って聞いていたから、てっきり同じような男だと思っていたわ。」

二人共、王女と聞いて少し驚いていた。

「オアランドの王女、ジェシカ様はグラゼン様の妹ですから。」

レイドとシリアは、テイラスに連れられ王室へと招かれる。

「ジェシカ様。レイド様とシリア様をお連れ致しました。」

「ありがとうございます。」

椅子に座っていた女性はゆっくりと二人に近寄る。それなりの歳はいつている筈だが、それよりも断然若々しい女性だ。

「初めまして。オアランドの王女をしていますジェシカです。よろしくね、レイド君、シリアさん。」

かなりゆっくりと話すジェシカにレイドが早速質問をぶつける。

「ではジェシカ様」

「あら！兄と知り合いなんですよ？ジェシカさんでいいわよ。」
突然遮られ、そう言われたレイドは少し戸惑う。

「はあ、そうですか。ではジェシカさん」

「うん！それでいいわ。」

変わらず遅いスピードで言葉を出し、笑顔を向けるジェシカに再び戸惑うレイド。

「……えっと、バージューズについて、何か情報は入ってないですか？」

「それが何も入って来ないのよ。船艦もどっか行っちゃったみたいだし……。まあゆっくりしていつてね。」

レイドとシリアは苦笑いを浮かべる。

「それよりシリアさん？」

「はい。」

「レイド君って、普段どんな人？」

「はっ??？」

ジェシカの意外な質問に、突然名前を出されたレイドが疑問の声を上げた。

「そうですね。ここぞって時は頼りになりますけど、普段はマイペースですね。」

ちやっかり答えるシリア。それを聞いたジェシカは再び笑顔になる。

「やっぱり！なんか私と同じ感じがしたのよ。気が合いそうね、レイド君。」

「はあ……。」

顔を向けられ、ウインクまでしてくるジェシカに三度戸惑うレイド。

それからも質問責めを受け続け、二人が解放されたのは、1時間後であった。

「ハアア〜。駄目だ！俺あの人苦手だ！」

部屋に案内され、ベッドに倒れ込んでそう口に出した。

「あら、私は面白い王女だと思うわ。」

「大体、どこが同じ感じがした、だよ。マイペース過ぎるだろ！声を聴くだけで疲れる！」

「まあ確かにそうだけどね。」

それからシリアはレイドの愚痴を延々と聞いていたが、何やら宮殿内が騒がしくなった為、愚痴も終わりを遂げた。

「何かあったのか？」

「とりあえず、ジェシカさんの所へ行ってみましょう。」

レイドは嫌そうな顔をしながら、渋々王室へ足を運んだ。

「ジェシカさん。何かあったんですか？」

シリアが尋ねる。

「あつ、良いところに来てくれたわね。実はね、さつきこの宮殿の裏にある、聖なる神殿に二人の侵入者が入り込んだらしいのよ！」

流石に、いつもより少し速いスピードで話すジェシカ。

「聖なる神殿？そこには何かがあるんです？」

「そこにはね、昔からある水晶が祀られているの。私達はレッドクリスタルと呼んでいるわ。」

「レッドクリスタル…。それは一体何ですか？」

「ん〜。ずっと前からある物だから正確には分からないけど、何でも、太古の強力なモンスターが命と引き換えに落としたり、って言われているわ。」

「まあそれが何にしろ、行くしかないな。」

「そうね。バージューズの奴らって可能性が高いから用心しましょ。」

二人は、ジェシカに神殿のある場所を聞いた。

「この宮殿の裏にある通路を真っ直ぐ行った先よ。」

それを聞き二人は移動しようとするが、ジェシカに止められる。

「ちょっと待って。神殿はこの宮殿並みに広いわ。テイラスを連れて行って。レッドクリスタルの場所を知っている人がいた方がいいと思うから。テイラス、いいかしら？」

ジェシカは二人にそう言った後、テイラスに顔を向けた。

「承知しました。行きましょう！」

レイドとシリアはテイラスの後に続き、神殿へ向かった。

ジェシカの言った通り神殿はかなり広く、モンスターも住み着いている有り様であった。テイラスがいなければ、間違いなく迷っていただろう。

「テイラスは何でこの神殿の道を把握しているんだ？」

迷うこと無く進むテイラスを見ていたレイドが疑問に思った事を口に出した。

「時折、ここで修行するんですよ。モンスターがいるので相手に困る事は無いですからね。それを続けていたら自然と覚えてしまいました。」

剣を構え、慣れた手つきでモンスターを倒しながら答える。

「警備部隊に見習って欲しいわね。」

それを聞いたテイラスは笑顔で言葉を返す。

「私はジェシカ様の護衛役ですから。それなりに強くないと務まりません。」

レイドも向かって来るモンスターを倒し、テイラスを見た。

「テイラスって何歳なんだ？」

「19歳になりました。」

「……俺よりしっかりしてんな。」

一目見た時から若いとは思っていたが、まさか年下だとは思っていなかった。

「でも、お二人もしっかりしてますし、僕より強いですから。動きを見ていれば分かります。僕の見習うべき人達ですよ。」

「嬉しいこと言ってくれるねえ。今度優秀な武器職人を紹介してやるよ。」

「それは楽しみです。それより、あの扉の中の部屋にレッドクリスタルがあります。」

テイラスが指した扉を開けると、赤く輝いているレッドクリスタルを持ったダインとラーグが立っていた。

「！…何処までも邪魔をしようとする奴らだ。」

ダインがレイドとシリアを見て小さく呟いた。

「やっぱりあなた達だったのね！」

「とりあえず、その水晶は返して貰います！」

斬り掛かろうとするテイラスをレイドが止める。

「待て！奴らはそう簡単にはいかない。それを何に使つつもりだ！
？ダイン！」

テイラスを止めたあと、ダインに問う。

「これは完全体の最後の材料となる筈の物だ。」

「そんな物必要ないわ！あなた達は此処で止める。」

ダインは不適な笑みを浮かべ、シリアを見る。

「ヤマトの死を乗り切ったか。あそこで終わりだと思っていたがな。」

「……父の為に、あなた達を殺すわ！」

「気付かないのか！？この音が。」

ダインの言葉で、三人は耳を澄ます。すると、僅かだが外から音が聴こえてきた。

「この音は……船艦！？」

「ご名答！我々は忙しいのでな。お前達に構っている暇はない、と言いたいとこだが、少しは自分達の愚かさを思い知るがいい。ラーグ。5分間こいつらと遊んでやれ！」

そう言うと、ダインはレッドクリスタルと一緒に転送された。

残されたラーグと戦う三人であったが、ラーグの力は想像以上だった。シリアは狙いを定め銃を撃つが殆どかわされ、当たると思った攻撃も手のひら一つで止められた。

「銃が…効かない！？」

シリアの攻撃は完全に無効であった。そして、テイラスも深手を負い倒れ込む。

レイドは、テイラスにとどめを刺そうとするラーグの後ろを取り、

力一杯剣を振り下ろす。が、それに反応したラーグの攻撃で剣を真つ二つに折られてしまう。

「……マジかよ。」

レイドは一旦シリアの隣まで下がる。完全になす術の無い三人であつたが、ラーグは動こうとはしなかった。

「5分経った。」

そう呟き、ラーグもその場から消えていった。

「はつきり言つて、助かつたな。」

レイドがシリアに声をかける。

「ええ。これは考え物ね。」

シリアは深刻な顔で頷く。その後レイドが倒れているテイラスに近付く。

「テイラス！大丈夫か？」

「奴らは……？」

テイラスは顔をしかめながら声を出した。

「逃げていった。というか俺達が助けられた感じだけだな。立てるか？」

テイラスはレイドの手を借り立ち上がる。しかし、思ったより傷は深い。早く治療をしないと危ない状況だった。

「急いで戻りましょ！」

テイラスはレイドとシリアに支えられる状態で、宮殿へ戻って行った。

宮殿へ戻つたレイドとシリアはテイラスを医療班に任せ、ジェシカがいる王室へと足を運んだ。

「すみません、ジェシカさん。私達がいながらレッドクリスタルをみすみす奪われてしまいました。」

シリアがジェシカに頭を下げる。それにジェシカは笑みを浮かべて言葉を出す。

「いいのよ、シリアさん。あなた達がいなかったらテイラスは助か

らなかったのだから。逆に感謝してるわ。」

シリアは頭を上げるが、笑顔は無かった。一方のレイドも渋い表情だった。

「しかし、俺達はラーグを、バージルーズを甘く見ていた。今思えば、フランが気をつける、と言ったのも分かる。」

「そうね。私達の攻撃が何一つ通じなかった。何か対策を考えないと……。」

考え込む二人に、ジェシカが声をかける。

「でも、その状況でもあなた達は怪我さえしていないわ。武器さえ良ければ勝てると思うのだけど。」

「確かに相手の攻撃は見切れたわね。」

「問題はその武器をどうするか、だな。……グリーンに頼んでみるか。」

「その前に、ジェルラードに戻って聖官に会いましょう。」

レイドはそれに頷き、ジェシカを見る。

「ジェシカさん。俺達はジェルラードに戻ります。」

「ええ。また来てね！」

レイドはその言葉で苦笑いを浮かべた。

二人はマッドと連絡を取り、グリーンピアに乗り込みオアランドを離れた。

動き出した組織、刃向かう力

ジェルラードへと戻ったレイドとシリア。二人は四聖官にオアランドでの出来事を話した。

「そうか…、レッドクリスタルが狙いだっただか。」

グラゼンが苦々しく声を出した。以前はオアランドの王だった彼は勿論レッドクリスタルを知っていたので、奪われた事は良く思えないが、妹、ジェシカが無事と知り、安堵の表情にも見える。

しかし、二人が負けたとなれば、ジェルラードとしても選択肢は少ない。

「でも、そこまでの戦力を持っているなんて…。五大惑星の部隊を集結させて全面的に戦うしかないのかしら？」

「そうじゃのう…。最悪の場合、相当の死者が出るが、それも仕方ない事なのかもしれん。」

ダミアに続き、ジーマの頭の中もそれしか思い浮かばない。ここまでこればバージルーズとの全面戦争しかない。そうなれば、多大な被害が出ることは確実だった。

「大変です！聖官！！」

いきなり一人の女性が慌ただしく部屋に入ってきた。髪も乱れ、息も切れている。その様子から相当な事であると想像できた。そして、全員の視線がその女性に集まった。

「何事じゃ！？ザナリス。」

ジーマが先程入ってきた五大惑星通信管理者の一人、ザナリスに声をかける。

「テトランス、エルリール、グザリス、オアランドの4惑星の都市部に数多くの人造生命体が現れました！」

「なんだと！？」

「今それぞれの警備部隊が鎮圧に向かっていますが、一向に目処がたちません！既に怪我人も多く出ています！」

そんな大量な数という事は恐らく失敗作だろうと予想が出来た。グザリスの研究所は潰したものの、他の惑星にも研究所が有ってもおかしくはない。

そして、こんな事をし始めたということは、間違いなくバージールズが本格的に動き始めた証拠だった。

「ヴァイラには現れなかったの？」

シリアは唯一人造生命体の現れなかった惑星、ヴァイラを疑問に思っていた。

「そうなんです。ヴァイラに現れたという情報は入っていません！」
ザナリスが言い終わった直後、再び一人の男が慌ただしく入ってくる。

「大変です！聖官！」

「今度はなんじゃ!？」

ジーマも動揺が隠せない為、自然と強い口調になっていた。

「ジェルロードの通信、及び惑星防御システムが乗っ取られました

!!!」

「!!!!!!」

その言葉で、一瞬部屋の中が凍り付いた。四聖官全員は度肝を抜かれている状態だ。

五大惑星のシステムは全てジェルロードが管理している。その為、防御システムが乗っ取られた以上、惑星に防御シールドを張る事が出来ず、簡単にメテオカノンで破壊出来る事を意味していた。

その時、その報告を待っていたかのようなタイミングで部屋にモニターが現れ、ヴァルログからの通信が入った。

「これはこれは。楽しんで頂けましたか？四聖官の諸君。」

通信システムを奪った為、バージールズはどこでもモニターを現し、会話をする事が可能となる。そして、早速ヴァルログが通信を

してきた、ということだ。

全てが自分の思い通りに動いているのか、ヴァルログは楽しそうにしている。勿論、ヴァルログ側にもこちらの映像が映っているの、どんな顔をしているのかはすぐに分かるから、というのも有るだろう。

「ヴァルログ！貴様、五大惑星の人達を全滅させる気か！？」

その顔を見たグラゼンがいきり立つ。

「そんな事したら私が王に成ったという証が無くなるだろ、グラゼン。全ての人にバージルーズという組織の恐ろしさを見せる為だよ。この映像は全惑星にも届いているからな！」

ヴァルログの言う通り、ほぼ全員がこの映像を見ていた。

一般人にとってはここで初めてバージルーズという組織の存在を知る事になった。

「今日は皆さんに見て貰いたい物があつてな。」

そう言うと、画面はどこかの街の風景に変わった。

「ここは……ヴァイラの街だ！」

レイドには見覚えがあつた。街の後ろに僅かに見える砂地。そこはヴァイラにある砂漠地帯。レイドも一度、モンスター退治の為に砂漠を延々と歩いたことがあつたのだ。

そして突然、地震のような激しい揺れが起こったと思うと、街の中央、地面の中から巨大な建物が姿を現す。その空まで届くかのよくな黒く歪な建物は、正に、王者のようにそびえ立っていた。

その建物付近にあつた綺麗な街並みは、無惨な姿へと変貌を遂げた。

その後、画面はヴァルログへと変わる。

「どうかね？我々が長年地下で作り続けたこのバージルーズ城は！？防御シールドも張ることができ、メテオカノンも装備してある。これぞ最強鉄壁の要塞だ。」

その圧倒的なバージルーズ城を見た四聖官は出す言葉さえ見つか

らないでいた。四聖官の様子にヴァルログも満足そうな顔をする。
「どうだ!? レイドにシリア。まだ我々に敵対するなら此処を貴様等の墓場にしてやるうと思ってるのだがな。」

突如名前を出されたレイドとシリアだったが、二人は冷静そのものであった。そして、シリアが苦笑いを浮かべる。

「そんな場所を? それならもう少し飾り気が欲しいわ。」

「フツ。ラーグに負けた割には強気な発言だな。いいか! 全人類の諸君よ! 我々に逆らうところなる事を頭に叩き込め! !」

ヴァルログは何かのボタンを押す。すると、次々にヴァイラの街に光状の物が降り注ぎ、一瞬にしてヴァイラの街、その近辺を攻撃していった。メテオカノンではないものの、その威力はかなりのものだ。

「なんてことを……。」

「ヴァイラの街が……。」

ヴァイラの街が壊滅される様子を見ていることしか出来なかった四聖官から、次々とぼやき声が出てくる。その部屋にいた数人のバージルズ部隊員は立っている力も無く、床に座り込む始末だ。

「これがバージルズの力だ! まだ刃向かう気かな? お二人さん。」

最高の笑みで話しかけるヴァルログ。

「……逆に刃向かう気が強まったわ!」

「このままお前の思い通りになると思うなよ!」

レイドもシリアも、怒りを抑えるように言葉を出した。

「ハッハッハ! では君達を私のパーティーに招待してやろう。来るがいい! このバージルズ城へ! !」

でも、時間は無いぞ。明日の夜明けにテトランスの一部を攻撃する。このヴァイラのようにな!」

レイドはその言葉に驚愕する。

「お前の願いは人々に力を見せる事だろ！！その人達を殺してどうする！？」

「多少の犠牲は付き物だ。それに、街は沢山ある。1つくらいどうってことはない。」

「お前は…死ぬべきじゃ。」　　ジーマが俯き、震えながら言葉を絞り出した。

「ふん！じじい。お前達四聖官に何が出来る？警備部隊も失敗作の人造生命体だけで精一杯。ジェルロード部隊も同じだ！平和呆けた連中には何も出来ないんだよ！！」

確かにその通りであった。四聖官は所詮五大惑星を見守っているにしか過ぎない存在だ。こういう敵が現れた場合、成す術は何も無い。

ジーマも、他の三人もヴァルログに対し何も言えなかった。

その四聖官とは思えない小さくなった背中を見たレイドとシリアはヴァルログを睨む。

「待っているよ、ヴァルログ！必ずパーティーに参加してやるよ！！」

「あなたにプレゼントを持って行くから、受け取るといういわ！」

「それは楽しみだよ。」

そこで通信は切れた。

依然、四聖官はうなだれたままである。自分達には何も出来ないという心の傷は思ったよりも深いものであった。

「あなた達がそんなんでは、この戦い、負けるわよ。」

見るに見かねたシリアが四聖官に声をかける。

「……しかし、我々には何も……。」

「まだ出来る事はあるでしょ！」

大きい声で言うシリアに、四聖官の顔が上がる。それを見たレイドが口を開く。

「まずは、メテオカノンを完成させて下さい。それから、ジェルラ

ード部隊も各惑星の警備部隊の援護。テトランス住民の非難。

まだ、バージルーズに負けた訳じゃ無い。あなた達にもやらなければいけない事があるんだ！」

レイドの言葉に、四聖官だけでなく、座り込んでいた部隊員も立ち上がった。

そして、第三部隊長ステイブが行動に移る。

「四聖官！我々は各惑星の援護に向かいます。」

そう言っつて仲間を連れ、勢い良く走っつていった。それを見た四聖官にも活気が戻る。

「私はメテオカノンを急いで完成させるわ！ダミア、手伝っつて貰える？」

「勿論よー！！」

ハリーとダミアも部屋を出て行く。

最後の追い上げ、と言わんばかりの騒々しさがジェルロードを包んでいった。レイドとシリアも自然と顔を合わせ、笑みを浮かべる。

「君達はこれからどうするつもりなんじゃ？」

「俺達はこれからエルリールへ向かいます。武器がないと何も出来ませんからね。」

「分かった。我々も出来る事をしていく。」

「お願いします。行こう、シリア。」

シリアは一度頷き、レイドと共にその場を後にした。

レイドもシリアも、心の中では不安があつた。一度ラーグに負けている。武器は効かなかつた。普通の武器を手に入れても結果は同じ。

それでも、二人に残されている道は、刃向かう事だけであつた。

期待と協力

「レイド…？これはどういう事かしら？」

「俺に聞かれてもなあ…。」

レイドはシリアの問いに困惑しながら答える。

エルリールの宇宙航空ステーションの1階ロビーで足を止めるレイドとシリア。

そのロビーには沢山の人が集まっていた。

人造生命体が街に現れた事で、ステーションの中に非難しているのか…。いや、ならばこの二人を見た周りの反応がおかしい。歓声とも思える声が聴こえれば、何やら見たこともない鉱物や武器のパーツを運んで来る。それに、皆の表情はひと仕事終わったように疲れていた。中には全身泥だらけの奴や、傷だらけの奴もいる。只の避難民だとは思えない。

「よう、お二人さん！」

二人の前に現れたのは、武器職人のグリーンであった。

「グリーン…これは一体…。」

「四聖官様から連絡が入ってな！なんでもお前達の武器が効かなかつたらしいじゃねーか!？」

「あ、ああ。それで今からグリーンに会いに行くところだったんだが…。」

「そのぐらいの事は分かってたよ！だから、俺達武器職人が集まって今から最強の武器を作ってる。」

グリーンがそう言うと、数人の武器職人が前に出る。恐らく、全員が腕に自信を持っているのだろう。その顔にはかなりの意気込みが感じられる。

「グリーン！最後の材料、手に入れてきたぞ!!!」

人混みをスルリと抜けて声を出した男の手には、よく分からない

機械が握られている。

「感謝しろよ！俺達が協力してグリーンに言われた材料を調達して来たんだからな！」

その声を出したのはレイドが振り返りにしたゴロツキ共だった。

「お前ら…、まさか俺達の為に…？」

レイドの反応に、ゴロツキ達は照れたように顔を逸らす。

「バツ、ちげーよ。このままあの変な奴の思い通りになるのが嫌だったんだよ！お前達の為じゃねえ！！」

そう言っただけの人混みの中へと下がって行った。

「まあ、そういう事にしとくか。」

「だが、皆の協力が無かつたらこんな短時間でここまで集まらなかったからな。」

「分かってるわよ、グリーン。それで？完成までどの位かかるの？」

「三時間で作る。それまで休憩でもしといてくれ。」

グリーンは二人にそう言うと、職人仲間の方に顔を向ける。

「よし、お前ら！全力で取り掛かるぞ！！」

勢いのある掛け声と共に、グリーン達は鉱物やパーツを持ってステーションの中にある武器工房へと消えていった。

あれほどのメンバー、あれほどの威勢があれば、相当な武器が出来上がる。そして、これだけの人が協力している。レイド達は感謝の気持ちで一杯だった。

二人は暫く集まった人達のやり遂げた表情を眺めていた。それを見ているだけで、自然と二人の顔も綻んでくる。

「レイド君、シリア君、聞こえるか？」

シリアの持っている通信機からジーマの声が耳に入る。

「ええ。聞こえるわ。でも、通信システムは乗っ取られた筈じゃ…？」

「これは緊急時の別回線じゃ。それより、グザリスとオアランドの人造生命体はある程度片付いた。その二つの惑星はもう大丈夫である。テトランスの住民の非難も終わった。メテオカノンももうす

「ぐ完成じゃ！」

「分かったわ！エルリールは私達がなんとかする。メテオカノンが完成したらまた連絡を頂戴ね。」

「了解じゃ！」

そう言つて通信を切る。

それを聴いていた周りの人達は、何故だか驚きの顔や、笑顔の顔でシリアを見ている。その理由が分かっていないのは当の本人だけであつた。

「なんか私、変なこと言つた？」

その視線に気付いたシリアはレイドに尋ねる。そのレイドも笑いながら答える。

「さっきの会話だよ！皆からしてみれば四聖官なんて会うことも出来ないお偉い様なんだぞ。そのお偉い様がシリアの前じゃちっぽけな存在に見えてるんだよ。」

レイドの言う通り、四聖官は一般人にしてみれば偉大な人物だ。ヴァルログでさえ、以前はそう思われていたのだが。

そしてその人物にシリアは殆ど敬語を使うことが無い。ましてや、先程のやり取りではシリアの方が主導権を握っている。レイドは前から気付いていたが、ここで聴いていた人達は少なからずこの事実に驚いていた。

もつとも、シリア自身はそんな事考えてはいなかつただらうが…。

そして、その和やかなムードを人造生命体によつて遮られる。

突然悲鳴が上がり、ステーションの中にいた人達は勢い良く奥へ非難する。二人の前の視界が露わになつた時、50体近くの人造生命体の大群がステーションの中に入って来ていた。

「さて、武器が出来上がるまでの三時間。私達も少しは働きましょう！」

銃を構えるシリアとは別に、レイドは近くにいた警備部隊の人に声をかける。

「ちょっと武器を借りるよ。その代わり休んでいいから。」
レイドは剣を手にとると、シリアと共に50はいる人造生命体の大群に向かって行った。

「凄い……。」

「やっぱ強いな……。」

二人の戦いを初めて見た人達からは、その様な声が飛び交っていた。50の人造生命体は二人の前にももの数分でひれ伏していた。

二人が出会ってからまだ数日しか経っていないにもかかわらず、シリアがどれに標準を合わせているか、レイドがどういふ動きをするかなど、自然と分かるようになっていた。だから無駄のない攻撃が出来る。それだけ二人の相性が良いという事だ。

倒れ込んだ人造生命体の中に立つ二人の姿は、恐らく、ここにいる全ての人の脳裏に焼き付ける事が出来るだけのオーラはあっただろう。

「さて、もう少し倒しに行きますか。」

「そうね。これだけじゃ満足出来ないわ。」

余裕の表情で互いに頷いた二人は、ゆっくりと街の方へ消えていった。

2時間半後

二人は、傷一つ無い状態で街の中で会った警備部隊と一緒にステーションの中へ戻って来た。

「多分もう人造生命体はいないわ。街に戻っても大丈夫よ。」

その言葉でステーションの中にいた人達から歓声上がる。

「あと30分。俺達は休憩しますか。」

「この店、入ってもいい？」

人造生命体が現れた騒ぎで、あきらかに閉まっている店の前で、

シリアは集まっていた人達に向かって声を出す。

その声に反応した数人の店の店員が慌ただしく駆け寄って来る。

「ど、どうぞ！」

一人の女性が緊張した面持ちで店を開ける。それを苦笑いをしながら二人は店の中に入る。

コーヒーを2つ頼むと、レイドは溜め息を一つだす。

「有名になっちゃったよ…俺達。」

「悪くないんじゃない？」

「まあ、悪くはないが…。シリアと会った時はこんな事になるとは思っても見なかったよ。」

「それは私も一緒よ。」

レイドは少し間を空けた後、小さい声で呟いた。

「……勝てると思うか？ 奴らに……。」

「……勝たないといけないわ。……ていうか、何！？いつになく弱気ね！レイドは負けるつもり！？」

「んなわけないだろ！俺が負けると思うか！？」

「思っていないわ。それでこそレイドよ！」

シリアはコーヒーを一口飲む。

レイドは笑みを浮かべた。シリアのその一言でレイドの心の片隅にあった不安感を消し去ってくれたように思っていた。

「シリアはこれが終わったらどうするんだ？グザリスに戻るのか？」

とつさに質問されたシリアは暫く考える。

「レイドは？私といてくれる、って言ったのは本当？」

「ああ。シリアが望むなら。」

「じゃあ一つ、考えている事があるわ！」

その後、シリアはその考えている事をレイドに話した。その要望にレイドも、楽しそうだ！と言って了承した。

それは平穏な幸せでは無いかもしれない。でも、レイドとシリアだからこそ出来る事なのかもしれない。

それを今知る術は無い。

3時間を少し過ぎた時、グリーンが二人のいる場所にやって来た。

「ふう。少し遅れたが完成したぞ！レイドはこれだ。」

グリーンは一本の剣をレイドに渡した。一見、なんの変哲もない剣だが、持った瞬間に違いが分かった。

「軽いな。」

「軽いだけじゃなく強度も最高レベルだ。スラム街でもなかなか手に入らない一番硬いと言われている鉱物を使ったからな！それから、シリアはこれだ！」銃を受け取ったシリアも、軽い、と口に出した。

「それが一番手間取ったぜ。ジェルラードからメテオカノンって奴に使われるエネルギーの生成技術を教えて貰い、それをちょいと改良して銃で撃てるようにした。本体のパーツもレイドの剣と同じ鉱物だ。エネルギーは今はその中に入っている分だけだが、1日はずつとぶつばなせるだけは有る。どちらもちよつとやそつとじゃ壊れない。間違いなく最強の剣と銃だ！」

「ありがとな、グリーン！」

「その代わり、それで勝てなかったらぶん殴るぞ！」

「これが効かなかつたら恨むわよ！」

「それは大丈夫…だと思う。」

それから、その剣は《夢双爛》、銃は《エレメールガン》だ！」

「……名前まで付けてたのか？」

「何だ！その呆れた顔は！俺達にとって武器は子供の」

「じゃあ、行きましょう。レイド。」

話が長くなると感じたシリアはグリーンの話を通りレイドを促す。

「じゃあ、行ってくるよ。」

二人は四聖官に連絡を入れ、エルリールの人達の後押しを受けヴアイラへと向かった。

日常を求めて（前）

モニターでは見ていたが、やはり実際の目で見ると酷い現状であった。

全ての建物は崩れ落ち、美しかった街並みが何一つ残っていない。あちらこちらで倒れている人も既に動かない。生き残りは半壊したステーションの中で見たが極僅かだ。何度か足を運んだことがある二人も、今何処の辺りを歩いているのか把握出来ないでいた。それだけ周りの景色が一緒なのだ。

1つ違うのは、崩れ去ってしまった街中に、堂々とそびえ立っている黒く、歪な建物。

今の技術力ならば間違いない最高レベルの建物、と言っているだろう。

砂漠以外に有名な物は無いここヴァイラに、平和な街の風景と引き換えに新たなシンボルが出来上がっている。それは誰一人と望んでいなかった物。街の人達には何一つ得ることが無い物。

その皮肉な建物を目指すレイドとシリアはひたすら廃墟と化した道を歩いていた。

「……レイド、気付いてる？」

「ああ。何もしてこないから、ほっとくと思っただけだ。」

「そろそろウザくなってきたわ。」

「そんな会話をしつつ、二人は立ち止まり後ろを振り返る。

「もう出て来たらどう？」

二人は少し前から視線を感じていた。何かを仕掛けて来る訳ではなかった。気付かぬ振りをしていたが、シリアのイライラは我慢出来なかったようだ。

そして、シリアの声で崩れた建物の陰から一人の少年が出て来る。

「やっぱり来たんだね……。」

その俯いている少年にレイドは見覚えがあった。

「久し振りだな、少年！」

「知ってるの!？」

少し驚いているシリアにレイドは頷く。

「最初に襲われた宇宙船の中で、幻影装置を操作していた少年だ。」
シリアもその時を思い出す。

「ああ、あの時の…。やっぱりバーギルズの一員だったのね。」

「二人とも、ヴァルログを止めに来たんだよね。」

未だに俯き、力無い声で話す少年。最初に会った時と明らかに態度が違う少年に、レイドは少し疑問を持つ。

「……………ああ、そうだ。」

「もう無理だよ。……………完全体も完成間近。鉄壁の城も出来た。もう誰にも止められない。」

「止めてみせるさ。俺達が…。」

「無理だよ…………。ヴァルログは絶対の存在なんだ…………。」

「じゃあ…………何故あなたは泣いているの？」

少年は俯いたままだった。しかし、地面にはポタポタと水滴が落ちていた。

「僕は…こんな事まで望んでいなかった。ただ、僕を捨てた両親を……………見返してやりたかっただけだったんだ！」

それは初めて少年が打ち明けた心の叫びだった。少年の願い、苦しみ、罪悪感、などの感情が二人には痛いほど伝わって来た。

「少年…。もう充分苦しんだだろ。後は俺達に任せて、幸せになれる道を探すんだ。」

「たった二人じゃ何も変わらないよ…………。そして、ヴァルログを裏切れば僕は殺される。僕は死にたくないんだよお!!！」

そう言っつて、少年は仮想物体を出す。

「僕の生き残る道は…二人を止める事なんだ！」

少年の出した仮想物体のモンスターは一気に二人に襲って来た。いち早く動いたレイドは、そのモンスターを素通りすると、少年の目の前に立つ。慌ててナイフを出そうとする少年だったが、レイド

の手の方が早かった。

首筋を打たれた少年は、薄れゆく意識の中で、悲しそうな笑みを浮かべているレイドが目に入る。

(ごめんなさい……。)

それが、少年がこの絶望の中で感じる最後の思いであった。

レイドは倒れる少年を受け止め、手に持っていた幻影装置を壊した。その後、少年を抱え、大きな瓦礫の上へ寝かせた。

「今は、ゆっくり休め。次起きた時に見る景色は、平和な日常だ。」

「ええ、そうね。その時は、あなたを縛る物なんて、何も無くなっている筈よ。」

二人は、寝ている少年にそう言った後、静かに離れて行った。

そびえ立つ建物の中へ入った二人が最初に目にしたのは、その通路を埋め尽くす程の人造生命体だった。

「ようこそ！お二人さん。囁かながら、それは私からのプレゼントだ。私は頂上で待っているぞ！十分に楽しんでくれ！」

その場所に響き渡るヴァルログの声。そして、着々と二人に近づくプレゼント集団。

二人は早速、新しい武器を構える。

「さて、レイド。パーティーの始まりよ。それなりに楽しませてくれそうよ！」

「そうだな。俺達のプレゼントも受け取って貰わないとな！」

二人は一気に敵の中へ突っ込んで行った。

「凄いわ、この銃！」

「これが終わったら、かなりのお礼をしないと！」

二人は次々と人造生命体を倒していく。その速さはエルリールで

50体倒した時の比ではない。

そして、1階にいる敵を全て倒し、奥まで進むと上へ繋がっているであろうタイムゲートが設置してあった。

「これで最上階まで行けたらな…。」

「無理な願いね。多分…。」

少し期待していたシリアの思いも虚しく、上へ移動した直後に目にしたのは、これまたかなりの数の人造生命体であった。

「こんなに沢山プレゼントは貰えないわ。」

「処分あるのみ!!」

二人は再び敵に向かって行く。

二人が入ったのは夕方。

それから2時間はたった頃にやっと中枢近くまで来ていた。

その頃、最上階では

「ヴァルログ様。二人が中枢区画まで到達しました。」

ダインがヴァルログに近付く。そのヴァルログの後ろには、研究所で見たようなカプセル型の機械が置いてあった。その中には、リーグと同じような人物が繋がれている。

「そうか、早いな！やはり使えん失敗作共だ！」

強い口調で言いつつ、ヴァルログの表情は穏やかなものだった。

そしてその視線は、ダインからもう一人の人物に移る。

「リーグ。そろそろお前の出番だ！今度は時間はたっぷり有る。楽しんでこい。」

リーグは返事をすることなく、いつもと変わらない無表情でその部屋を出て行った。

それを満足そうに見つめた後、ヴァルログはカプセルに手を付ける。

「この完全体が出来上がれば、私の計画は成功したも同然だ。」

「ヴァルログ様。私とラーグで事足りると思いますが…。」
「何だ、ダイン。お前は完全体を動かす事に反対だったか？」
「反対という訳ではありません。しかし、それが暴走した場合、私でも止める事は出来ません。リスクが大きいかと……。」
「心配するな。こいつを動かすのはもつと先だ！今はお前達だけで事足りる。……久々に戦ってみたいか？ダイン。」
ヴァルログはダインに笑みを浮かべた顔を向ける。
「……ラーグがやられれば、そうなるでしょう。」
ダインの言葉に、ヴァルログは大きな声で笑い飛ばす。
「それは無いだろう！奴らは一度、ラーグに負けている。何回やつても結果は変わらない！」
ヴァルログはカプセルに入った完全体を見ながら笑い続けていた。

「ふう。うじゃうじゃと歓迎してくれるわね！」
「毎回同じ歓迎されても、楽しさが無くなるってもんだ！」
「もう中枢まで来たと思うんだけど、どう思う？」
「窓がないから分かん。ずっとここにいたら時間が麻痺するな！」
「同感ね！…あつたわ。次のタイムゲート！」
二人は入って、何十個目かのタイムゲートに乗った。
そして、この階も順調にタイムゲートの場所まで行き着いた。しかし、そこには一人の人物が待ち構えていた。
「おっと、メイスイベントの始まりだ！」
「あの時の借りは返させて貰うわよ！ラーグ！！」
ラーグはいつも通りに剣を構えた。
「お前達では、勝てない。」
「あの時の俺達だと思ふなよ！」
「もしそう思っていると、痛い目見るわよ！」
「……来い。」
ラーグのその声で、まずはレイドが向かって行った。

「お前には、剣を折られたな。お返ししてやるよ。受け取れ！」

レイドは思いつ切り剣を振るった。それを無難に剣で受け止めようとするラーグだったが、レイドの宣言通り、その剣は真つ二つに折れる。

「次は私の番ね！」

シリアは銃を放つ。こちらも左手でガードするラーグだが、その威力は前とは桁違いのものだった。

ラーグの左腕は肩から千切れ、壁にぶつかる。その自分の腕を無表情で見つめているラーグはレイドの一撃によって倒れ込んだ。

「だから言つたる。前と同じだと思つなつて。」

「痛い目見るわよつて。」

レイドとシリアはラーグの横を通り抜け、タイムゲートで上へと上がった。

そして、残されたラーグはゆっくりと目を閉じた。

結局、最後までラーグの表情は変わることはなかった。

「ヴァルログ様。」

「なんだ、ダイン？奴らを仕留めたのか？」

「いえ……、ラーグが殺られました。」

「！！！！！」

椅子に座っていたヴァルログは物凄い勢いで立ち上がる。その座っていた椅子はボタン、と床に倒れる。未だに声を出すことが出来ない様子だったが、無理矢理絞り出す。

「今、……なんと……？」

やっとの思いで出した声は、聞き取る事が困難なほどガラガラだった。

「ラーグが殺られました。……一瞬で。」

「バカな！！そんな筈は無いだろう！なんの冗談だ！ダイン！！！」

しかし、ヴァルログの言葉にダインは首を横に振る。

「ヴァルログ様。我々は、最も危険な奴らを招いてしまった、と言うことです。」

ダインの対応に冗談というものは無かった。それはダインの表情をみれば一目瞭然であった。

「そんな……、私は……どうすれば……？」

既に、これ以上無い程同様しているヴァルログに、ダインは静かに声をかける。

「……私が行きます。ヴァルログ様はもう、完全体を動かすしかありません。それだけが、あなたの生き残る手段です。」

ダインのその言葉は何を意味しているのか、ヴァルログにも感じる事が出来た。

そして、ダインはゆっくりとヴァルログに背を向けた。

「ダイン……！」

ヴァルログの呼び掛けに、背を向けたまま立ち止まる。

「お前は、私の右腕だ……！必ず戻ってこい。」

「……ヴァルログ様。……ありがとう、ございました。」

振り向く事無くそれだけ言い残し、ダインはヴァルログの元を後にした。

日常を求めて（後）

かなりの上層部まで来ているレイドとシリア。この辺りまで来ると、人造生命体もさすがにいなくなっていた。

「シリア！あれ！」

通路を難なく走っている時、レイドが前方に指をさした。そこには今まで無かった部屋に繋がる扉。

「こんな所に扉？ここが最上階だとは思えないけど……。入ってみるしかないわね！」

確かにここが最上階とは思えない程、今までの階と変わりない造りだ。しかし、このまま素通りする事は出来ず、思い切って扉を開ける。

そのこの部屋には数多くの機械とモニターが並んでいる。恐らく、この建物のコントロールルーム、という所だろうか。明らかに普通とは違う設備だった。

そして、その設備の前には数人の男女が機械を構う手を休め、こちらを見ている。どう見ても人造生命体にも、バージルズの幹部にも見えない。その人達は強制にバージルズに入れられたのだろう。二人を見つめるその顔には、やっと解放される、といったような安堵の表情に見えた。

「はい、お仕事ご苦労様！死にたくなかったら今すぐこの建物から出て行ってくれ！」

レイドのその声で、一斉にその部屋から出て行く男女。やはり嬉しそうな顔で出て行く人も少なく無い。

「やっぱり、無理矢理に入らせられたのね。」

「ああ、多分他にも多くいるだろうな。」

「私達がこのバージルズの頭を潰せば解決するわよ。」
「だな。」

二人は誰もいなくなった機械の前に移動する。

「これでジェルラードのシステムも元に戻せるんじゃないか？」

レイドはこれでこの城のシステムを管理しているなら、ジェルラードのシステムを乗っ取ったのもこれじゃないか、と考えた。

「そうね。少し構ってみるわ！」

シリアは慣れた手つきでモニターに何かを入力していく。とてもじゃないがレイドには無理な行動であった。

「なあ…、どこでそんなこと勉強したんだ？」

レイドは率直な疑問を投げかけてみた。

「私の父は科学者だったのよ。このくらいは小さい頃に教わったわ！」

視線を合わせることなく集中して次々と文字を打ち込むシリア。しかし、突然手を止めた。

「駄目ね…！」

「何が駄目なんだ？」

「パスワードがいるのよ。このシステムに閥与出来ないわ！」

モニターはパスワード入力画面で止まっていた。確かに、シリアなら元に戻すことは可能であったが、パスワードが解らない事にはどうする事も出来ない。シリアは落胆の表情を見せる。

「そこまでにしてもらおうか！」

低い男の声がコントロールルームに響く。二人は即座に後ろを振り返る。

「……お前がいるってことは、最上階も近いのかな？ダイン。」

部屋の入り口前に立つダインは自分よりも長い槍を構え、険しい顔で二人を見つめている。それを見れば、自然とヴァルログに近い事が実感できた。

「…予想外だったよ。まさかお前達がここまで来るのは。」

「随分な言い草ね！あなた達が招待しておいて！」

「それ自体が……間違っていた。お前達はあの時、ラーグに殺させるべきだった。」

「今更後悔しても遅いな！それはあの世でするんだな！」

「私はヴァルログ様の右腕。そう易々とお前達を上に行かせる訳にはいかない!!」

本気になったダインは強かった。もう少し前に戦っていたら確実に負けていただろう。しかし、ラーグを簡単に倒せた今のレイドとシリアに勝てる見込みは無かった。それはダインも承知の上での戦いだった。

「何故…お前ほどの奴がヴァルログに従う？」

レイドは深手を負いながらも懸命に向かってくるダインに尋ねる。その執念、その背負うものは何なのか、レイドには分からなかった。ダインとヴァルログの間に何があったのかを知りたかった。

「お前達には…理解出来まい！」

咳をする度に血を吐きながらも武器を構える。

「あえて言うなら、…私はヴァルログ様と共にある。ヴァルログ様を…守る為なら、死ぬ事も恐くない！」

ダインは力を振り絞り槍を振り下ろす。しかし、明らかに動きが鈍かった。そして、ダインの体を無惨にもシリアの銃が貫く。

力無く倒れ込むダインは既に虫の息であった。

「…お前は…側にいるべき人物を間違えていたんだよ。」

レイドは倒れたダインにそう呟いた。ダインは消えゆく意識の中で、何を見たのか、何を考えているのか、何を思ったのか、涙を一粒零し、目を瞑った。それこそ、レイドとシリアは理解出来なかった。

「後はヴァルログだけね。どうする？このシステム。」

「壊した方が早いんじゃないか？」

そう言っただけレイドはその部屋に持っていた爆弾を仕掛けた。

そして、数秒後に部屋は激しく爆発する。一応、ダインは別の場所に引つ張つといた為、爆発に巻き込まれた事は無かった。それがこの先、意味のあることなのかは分からないが。

爆発を見届けた後、シリアは四聖官に連絡を入れた。

「シリアよ。ジェルロードのシステムはどう？」

「やっぱりあなた達だったのね！バッチリ復旧したわ。これで大丈夫よ！後、メテオカノンも準備完了よ！戦闘機に装備させたから、いつでも向かう事が出来るわ！」

ハーリーは少し興奮気味に返答する。システムが戻った事で大方の勝利は全員がしているのだろう。

「分かったわ。その時は使う状況になればこっちから連絡するから、それまで待機しといて。あつ、それから、この建物の近くで少年が寝てると思うから、直ぐに保護してあげて。」

「分かったわ！気をつけてね、二人共。」

シリアは通信機をしまうと、レイドを見る。

「行きましよう！」

「ああ。俺達の最後の仕上げだ！」

「……おそい。ダインが負けることはない。必ず私の元へ帰って来る。」

「悪いが、それは有り得ない！」

突然の前方からの声で、ヴァルログの身体は震えだした。考え事に夢中になっていたヴァルログは部屋に入ってきた二人の存在に気付かなかった。近寄ってくる二人を見て、ヴァルログはとっさに椅子から立ち上がり後退る。レイドとシリアは、ヴァルログの顔色が見る見る悪くなって行くのに気付いた。

「ここまでよ、ヴァルログ！この建物のシステムは全て破壊させて貰ったわ！」

「ダインも死んだよ。もうお前の計画は全て崩れ去った。」

「馬鹿な……ダインが……。」

ヴァルログの後退りはカプセル型の装置で行き場を無くした。二人も自然とヴァルログからそのカプセルに目がいく。その人物は目

を閉じたままである。

「それが完全体……か？」

「ラーグと何も変わらないような気がするわ。」

「いいか！こうなったのは全てお前達の責任だ！どうなるうと私の知った事ではない！！」

突然騒ぎ出したヴァルログを二人は意味が分からないように見つめる。

ヴァルログはカプセルのボタンを押した。

中の液体が抜けていき、ゆっくりとカプセルが開く。

「ローグ！起きるんだ！！」

ヴァルログが中の人物に叫ぶと、目を開き、ヴァルログの横へと移動する。一見ラーグとなんら変わりはない。これが完全体か？と二人は簡単に思っていたが、ヴァルログだけは違った。何かを恐れるかのように、身体の震えは止まることは無く、一步一步、とローグから遠ざかっていく。

当のローグは、自分の手や足を見つめながら動かし、何かを確認しているようにも見える。その後、顔はヴァルログを捉える。

「私を作ったのはお前か？」

声もラーグと変わらない。しかし、次第にローグの威圧感というものが膨れてくるのを感じた。それは、ラーグにも、ダインにも無かったものだ。

「そ、そうだ！私がお前を生み出したのだ。だから…私の命令に従うんだ！！あいつらを殺せ！！」

ローグはヴァルログの指さした二人を見た後、再びヴァルログの方を向き直した。

「ふむ…。」

少し考えるような仕草をするローグに向かって、ヴァルログが更に怒鳴り声を上げる。

「聞こえているだろう！！私の命令は…。」

ローグは突然、怒鳴り声を上げたヴァルログの首を掴み上げる。

とつさの事で、二人は勿論の事、ヴァルログも反応出来なかった。

「な……なにを……！」

首を掴まれ苦しそうなヴァルログを少し笑みを浮かべて眺めるローグ。

「お前には感謝する！だが、私に命令するな！！」

ローグはそのままヴァルログの首を片手で捻り潰した。

無残な姿で放り投げられるヴァルログ。本人としたら、思いがけない死であつただろう。自分の生み出した者に殺されるとは、哀れ、という言葉しか思い浮かばない。

「…狂つてるな。」

「本当に…。」

二人の呟きに、顔を向けるローグ。その瞬間に、体感したこともない殺気が二人を襲った。それは、二人を一瞬でも硬直させる程のものだった。

「…お前達は、何だ？」

「何だ…、と言われてもな。お前の味方じゃ無いのは確かだな！」

強気に答えるレイドだが、顔からは自然と汗が流れ落ちる。

間違はなく、今まで戦った中で最強の敵。完全体の恐ろしさを感じることが出来た。

「そうか、ならば死ぬがいい。」

「そう簡単に殺せると思うなよ！」

「あなたを、元の形に戻してあげるわ！」

二人は意を決し、武器を構える。

「……やってみるがいい！！」

完全体との戦いは熾烈を極めた。ラーグを倒したレイドの剣もシリアの銃も、決定的なダメージは与えられないでいた。動きが素早すぎるのだ。

ローグは、その異質な性能で腕を剣や槍などに変える事が可能であった。それをまともに喰らえば最後、確実に命を落とす。そんな

中で戦い続けた。

幾度となく攻撃を受け、倒れ込む二人。

「マジで……洒落に……なんねえな……。シリア、大丈夫か……?」
剣を支えに立ち上がるレイドは、シリアに声をかける。

「……ええ……。なんとかか……。」

始まって数分しか経っていない中で、二人には傷が目立つ。どれもかすり傷程度だが、ローグは未だに無傷。

そんな中でも二人が諦める事は無かった。

何度倒れても立ち上がり、ローグに向かって行った。

かなりの長い時が流れた。

日付は変わり、今は既に夜明けを迎えようとしている。

激闘を繰り広げてきた二人も、体力の限界を向かえていた。しかし、負ける事は許されなかった。ローグをここで野放しにすれば、必ず悲劇が待っている。それだけは防がなければならない。二人はその想いを持ち、攻撃を続けた。

そして、状況は少しずつ変わっていた。二人の攻撃が当たり始めた。

見るからにローグの動きが鈍っている。

疲れを感じていないだろう。しかし、身体がついていけないのだ。その隙を二人は見逃さなかった。今持てる全ての力をローグにぶつけた。そして、レイドの剣が、ついにローグの身体を貫いた。

ローグはそこで初めて膝を着いた。

「き……さまら……。」

それでもゆっくりと立ち上がってくる。

「こいつ……不死身か!？」

「まずいわよ!……私達も、戦う力は殆ど無いわ……。」

二人共、壁にもたれかかり何とか立っている状態であった。もう体力の限界は優に超えている。もう一度攻撃されたら避ける事は出来なかった。

「シリア！もう一度、奴を倒れ込ませてくれ！」

シリアはそれに頷くと、震える腕で銃を構える。照準を合わせる事は出来なかったので、適当に五回放つ。その内二発がローグの脚と腕を捉えた。

その衝撃で、ローグは再び膝を着いた。

「シリア…通信機を！」

シリアも床に座り込みながらレイドに通信機を渡した。こういう戦闘で頼りになるのはいつもレイドだった為、シリアは全てをレイドに任せた。

「四聖官！聖官ー！」

「どうした！？」

かなりの強い口調で呼んだレイドに、少し焦りながら答えたジーマ。

「15分後にこの建物にメテオカノンを撃つて下さい！なるべく他の場所に広がらない程度の力で！！お願いします！」

レイドは一方的に通信を切ると、立ち上がるうとしているローグを見た。

「シリア…脱出するぞ。」

座り込んでいるシリアの手を掴み立ち上がらせると、二人は寄り添うように移動し始めた。

タイムリミットは15分。この最上階には一気に下まで降りるタイムゲートがある。それをヴァルログに会う前に見ていたのだ。

しかし、今の二人にはそれさえも微妙な時間だった。

残り1分を切った頃、ようやく建物から出ることが出来た。空は既に明るくなっていたが、そんな事を思う余裕も無かった。

「なるべく遠くに逃げないと…、私達も危ないわ…。」

「…わかつてる。」

二人は遅いスピードながらも、必死に走った。

15分後。時間ぴつたりと戦闘機が上空を飛び交い、建物に向かってメテオカノンを発射した。

最上階から一直線に落ち行く強烈な光は、瞬く間に建物を瓦礫へと変え、大爆発を起こした。

その爆風によって、ステーションの近くまで飛ばされたレイドとシリア。

「くっ……。シ……リア、シリア……。しっかりとしろ……。」

いち早く目を開けたレイドは抱えていたシリアを揺さぶる。

「んっ……。レイ……ド？」

「良かった。無事で……。」

目を開けたシリアを見て、ほっとするレイド。

二人は建物のあった場所を見る。そこは依然、高々と粉煙が舞っている。その光景を見た二人は安堵の表情を浮かべた。

だが、粉煙の中にヨロヨロと動く影があった。安堵の表情は直ぐに硬直した。

「う、嘘……だろ……？」

それは紛れもなくローグだった。少しずつ近付いて来るローグはもはやいつもの姿を保ってはいなかった。メテオカノンのあの攻撃を受けたのだから、それも当たり前なのだが、それでも尚、歩きながら二人に近付いていた。

二人の10メートル先まで来た時、シリアがローグの身体の中に赤く光る物を見つけた。

「あれは……レッドクリスタル……！」

それは、オアランドの神殿に祭られていたレッドクリスタルだった。

「確か、ダインが言ってたな。これが完全体の最後の材料だ、って。あれを撃ち抜けるか？」

レイドの言葉で銃を構えるシリア。だが、照準が合うことは無かった。

「ダメ…。腕に力が入らない！」

ローグは既に5メートル先まで迫っている。

レイドは銃を持つシリアの手に、自分の両手を重ねる。

「外したら俺達の負け。当たれば勝ちだ。」

この場面で笑顔を向けるレイドに、シリアも笑みを浮かべた。

「大丈夫よ。……私達なら。」

二人は目の前まで迫ったローグを見る。

不思議と腕の震えが止まる。

そして、銃を放った。

ローグはゆっくりと倒れていった。

それを見た二人もまた、力無くその場に倒れ込んだ。

心地良い風、澄んだ空を今やっと感じる事が出来た。

「空が……綺麗だな。」

「なんだか、久し振りのような気がするわ。こんな穏やかな空を見るのは。」

「平和な証拠だ。」

二人はいつまでもその場に倒れ込み、空を眺めていた。

未来へ向かって（終）

バージルーズの崩壊は直ぐに全惑星、全世界に伝わった。

攻撃対象にされたテトランスも、避難していた人達で賑わっていた。それはテトランスだけではない。レイド達に協力したエルリール、シリアの故郷ゲザリス、ジェシカのいるオアランド、一つの街を破壊されたヴァイラ、そして、四聖官のいるジェルラードも祭り騒ぎである。街中には歓声が飛び交い、喜びのムードが漂っていた。

その笑顔を人々に戻したのは、たった二人の男女。この二人の名前を知らない者は一人もいない。

「それにしても、さすがです！！僕は信じてましたよ！お二人なら必ずやってくれると！僕は二人に出逢えて幸せです！！本当に」

「少し黙って、ステイプ。傷に響くわ。」

ここは、グリーンピアの中。

ベッドに横たわり怪我の治療を受けている二人に、ステイプはかなりの大声で喜びを表していた。そのステイプをシリアが我慢出来なかったかのように制する。

ステイプはそこで、スミマセン、と小さな声で言うつと縮こまった。それを見たレイドは苦笑いを浮かべる。

ヴァイラのステーション前で倒れていた二人をグリーンピアに乗せ、今は治療させる為ジェルラードへ向かっている最中である。

「あの完全体はどうなった？」

レイドは落ち込んでいるステイプを励まそうと話題を変えた。

「今は完全に機能停止状態ですね。あのレッドクリスタルが動力源だったようですから。それが無くなった今、もう動く事は無いでしょう。」

ステイブも冷静になったのか、淡々と話した。

二人はそれを聞いて、心底ほつとしていた。

「またあんな奴が現れても、私は二度と戦わないわよ。」

「俺もごめんだ！その時はステイブに任せるよ。」

「むむむむ、無理ですよ！僕にどうにか出来る相手じゃ無いですよ

！！大体、僕が行っても」

「ステイブ、黙って！」

両手を顔の前で左右に振りながら慌てふためいているステイブに、再びシリアのきつい一言が突き刺さる。それによって更に縮こまるステイブ。どうやらシリアも少し遊び感覚のようだ。

レイドは縮こまっているステイブを見て、また苦笑いを浮かべるが、フォローすることは無かった。

ジェルラードで治療を受けて一週間。二人の怪我は完全に治り、いつも通りに動く事が出来ていた。

「イリーナ、レイド見なかった？」

シリアはレイドを捜して歩いている時、ジェルラードのオペレーターの女性、イリーナを見つけ声をかけた。

既にこの二人は四聖官並みの威厳を保っていた為、呼び捨てで話そうとも嫌がられる事は無かった。

もっとも、シリアにはそんなことは元々関係無いようだが。

「レイドさんなら、休憩室でコーヒー飲んでましたよ。…もしかして、デートの約束ですかあ？」

イリーナは茶化すような笑顔を向けそう言った。

「違うわよ！四聖官と話をするから呼びに来ただけ！」

「なあんだ。」

「何でそんなに落ち込むのよ！…まあいいわ。ありがとね、イリーナ。」

「お安い御用です。」

二人は笑顔を交わし、シリアはレイドのいる休憩室へ向かった。

「怪我也治つて良かったな、レイド!」

休憩室では、レイドと第二部隊長、アレンが優雅にくつろいでいた。

「ああ。やっと剣が振れるようになったよ。」

レイドは治った腕をぐるぐる回す。

「ハハハ。じゃあ、俺の修行相手になつてくれよな!」

「アレンは銃だろ。ならシリアに教わった方がいいだろ!」

レイドの言葉に苦笑いを浮かべ、首を左右に振るアレン。

「お前はいいかもしれないが、俺は無理だ!」

「何故?」

無理だ!と言い切るアレンに問いかけるレイド。

「シリアちゃん……怖いんだよね。」

「誰が怖い!?!」

突然、後ろからシリアの声が聞こえ、これでもか!というぐらいオーバーリアクションで驚くアレン。その姿を見たレイドは腹を抱え笑っていた。尋ね返した時に、レイドはシリアが入って来ていた事に気付いていたのだ。

「い、いや!べ、別にシリアちゃんが怖いと言う訳じゃなくてだない!その、あの、」

必死に言い訳を考えているアレンにシリアも思わず吹き出す。

「まあ、いいわ。それよりレイド。四聖官が話たいことがあるって!行きましょう。」

「ああ。」

レイドは立ち上がり、アレンの肩をポンポン、と二回叩き、その場を後にした。

「怪我は治ったようじゃな！」

「ええ、お陰様で！」

会議室では、レイドとシリア、四聖官が集まっていた。

「ヴァイラはあれからどうなってますか？」

「今、多くの人達によって再建の準備がされているわ。このペースなら直ぐに復興できるわ。」

レイドの問いに、ダミアが答えた。

「それにしても、半日も戦っていたなんてな…！」

グラゼンが一週間前の事を思い出したように言った。

「それは私達自身も驚いているわよ。」

「二度と出来ないな…：あんな事。」

二人は渋い表情で呟いた。

「それで…？話とは？」

レイドが本題に入った。

「実は、四人で話し合ったんじゃないかな。我々と一緒に五大惑星を見守っていかんか？」

「それは一体…？」

「六聖官、ってことよ！」

ハリーが笑顔で答える。

レイドとシリアは顔を合わせ、笑みを浮かべた。

「悪いけど、遠慮させて貰うわ。私達は独自で見守って行くわ。」

「それに、まだまだ自由に生きたいんでね。頭を使うのはもう少し先にするよ。」

「まあ、その為には四聖官の協力も必要なんだけど、それはもう少し後に話すわ。」

そう言って二人は立ち上がった。

「俺達はこれから五大惑星を回ってみます。協力してくれた人達に

お礼もしないといけないし。」

「そうか、残念じゃな。」

「そうだ、レイド。ジェシカが逢いたがっていたぞ！オアランドに行ったら宮殿へ寄って行ってくれ。」

グラゼンの言葉に、苦難の表情を見せるレイド。

「……考えときます。」

そう言って部屋を出て行った。

「まずは何処へ行くの？」

「グザリスに行こう！」

「いいけど、何でグザリスなの？」

「飯も美味しいし、いい空気も吸いたいしな！」

「そうね。一番落ち着ける場所かもね。」

「それに、シリアのお父さんにも報告しないと！」

「報告って……何の？」

「無事に帰ることが出来ました、ってな。」

「何だ、……そんなことか。」

「何だと思っただ？」

「別に、何でも無いわ！」

その後も、色々話ながらグザリスへ向かった。

二人の手は、しっかりと繋がれたまま……。

完

未来へ向かって(終)(後書き)

読んで頂き、ありがとうございます。センスのない文章で申し訳
ありません。一応、続編も考えているので、感想、要望だけでも貰
えれば嬉しいです。では、またどこかでお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3503c/>

COSMIC STAR

2010年10月8日14時54分発行